

大学院論文集

第12号



杏林大学大学院国際協力研究科
2015年3月

目 次

秦 匡宏：接続助詞「ものの」の使われ方 —パブリックコメントの分析を通して— ……………	1
2013年秋学期・2014年春学期国際協力研究科修了者論文題目一覧 ……………	27
博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨	
関口 美緒：日本語心理動詞の研究 —生理的・心理的現象から言語表現までを考える— ……………	31
SELO YUDIBRATA：観光開発が住民の生活環境と健康に及ぼす影響 —インドネシア Kampung Dukuh 現地調査による考察— ……………	45
辛 奕羸：日英中「の, of, 的」の対照研究 ……………	48
董 昭君：指示詞と時間に関する研究 ……………	57
山内 美穂：「並列」機能を持つ助詞の談話における働き —「単独」用法に着目して— ……………	63

接続助詞「ものの」の使われ方

—パブリックコメントの分析を通して—

秦 匡宏

要 旨

本研究の目的は、現代の日本語母語話者が使う接続助詞「ものの」の使用実態を分析することである。2012年に公募された「福島原発の事故以降の政府のエネルギー・環境戦略」のパブリックコメント約88,000件の中から、接続助詞「ものの、」を含む複文263件を抽出して分析対象とし、意味用法に関する先行研究の分類枠を基盤としながら分析と考察を行った。結果、①「典型的な逆接とは異なる用法」の使われ方が全体の約86%（226件）を占めていたこと、②その中でも、「前件Aが後件Bの補足」の使われ方が146件（約64%）で最も多かったこと、という特徴があることが分かった。

また、規範的な用法から逸脱した使われ方も8件確認されたことから、従来示されてきた接続助詞「ものの」の用法とは異なる使われ方が存在する可能性があることも分かった。

キーワード：パブリックコメント、ものの、接続助詞、複文、逆接

The usage of the conjunctive particle “monono” — through the analysis of public comment —

Abstract

The purpose of this study is to analyze the actual usage of the conjunctive particle “monono” that native speakers of Japanese today use. The 263 complex sentences that contain conjunctive particle “monono,” were extracted from 88,000 general public comments sent in 2012 regarding the “post-Fukushima energy and environment policy of the Japanese government.” They were then analyzed and studied based on the classification frame of the previous studies on the usage of meaning.

As a result, 1) about 86% (226 cases) accounted for the usage that is different from the “typical reverse connection” and 2) among them, the most frequent was “the antecedent A becomes the supplement of the consequent B” which was found in the 146 cases (about 64%).

In addition, as the usage that deviates from the standard usage was also found in eight cases, it can be said that there exists a possibility of a different usage from the conventional usage of “monono.”

Keywords

public comment, monono, conjunctive particle,
complex sentences, reverse connection

1. はじめに

1.1. 研究の目的

本研究は、現代の日本語母語話者が使う接続助詞「ものの」の使用実態を分析することを目的とする。

分析の主眼は、次の2点である。

- ・意見文での使われ方に特徴はあるか。
- ・従来示されている接続助詞「ものの」の用法とは異なる使われ方は存在するか。

1.2. 研究の意義

接続助詞「ものの」に関する先行研究には、用例に基づいた分類分析を行い、意味用法の多様さを指摘している研究等¹が多く存在する。しかし、それぞれの意味用法がどれ位の頻度で日本語母語話者に使用されているのか、使用頻度の構成比率について分析調査した研究はあまり見受けられない。

そこで本稿では、平成24年に政府が募集したパブリックコメント制度²に寄せられた意見文を調査対象に、現代の日本語母語話者はどのような意味用法を多く使用しているのか、今まで示されてきた使われ方とは異なる使われ方が存在しているかどうか、に研究の意義を置いた。

2. 先行研究と本稿の立場

2.1. 先行研究

本節では、接続助詞「ものの」が本来何をあらわしているかについて、対照的な2つの考え方を紹介する。併せて本稿の立場を示し、基盤とする先行研究を定める。

2.1.1. 接続助詞「ものの」は逆接でないとする考え方

尾方(2001)は、接続助詞「ものの」は本来、逆接の表現ではないとする考え方に立ち³、接続助詞「ものの」が典型的な逆接の意味用法となるには、次の2つの条件

¹ 「ものの」を複合辞の一つとして捉えた研究も多く散見される。森田(1989)は複合辞について、語の枠を超える対象であり、解釈がむずかしい、と述べている。本稿では接続助詞として扱うこととした。

² 政令や省令を制定する前に広く国民から意見を募る制度は従来「規制の設定又は改廃に係る意見提出手続(平成11年閣議決定)」と称して存在していたが、平成17年6月の行政手続法改正からは「パブリックコメント制度」として現在に至っている。本稿では平成24年7月2日～8月12日に募集された「福島原発の事故以降の政府のエネルギー・環境戦略」をテーマとするパブリックコメントを分析対象とした。応募方法は①HPからの書き込み、②FAX、③郵送の3種類であり、後に個人情報伏せの形で公示されている。応募総数88,454件で、内訳は①58,986件、②19,684件、③9,784件であった。3節1項で詳述する。

³ 尾方(2001)は次のように述べている。

事柄の並立は、逆接性と本質的に近い関係にある。「ものの」は本来、逆接のための表示ではなく、事態の一面の認定の表現であると考えられるが、認定される事態が他の事態と対置されることによって、逆接的な関係の提示と了解されることが可能なのである。(尾方2001) p.1.1.23-p.2.1.1

を必要とすると述べている。

1) 2つの事態が同一平面上にあること

尾方(2001)によれば、「AもののB」において、前件Aと後件Bとが共に事態の叙述であり、かつ情動的価値が同等である場合には、逆接の関係になるとしている。尾方(2001)はこのような2つの事態の在り方を「同一平面上に並立する」と述べている。

2) 2つの事態が対置されること

尾方(2001)は、同一平面上に2つの事態があっても、典型的な逆接と成りうるかどうかは両者の対置の程度によらず、対置の尺度として「対照性」と「非順当性」の存在を述べている。⁴

尾方(2001)によれば、1)の条件を前提として、2)の「対照性」と「非順当」の程度を(+)(-)とすることで、その組み合わせから4つの用法が、典型的な逆接の用法には存在するとしている。

また、典型的な逆接とは異なる用法としては、次の5つを述べている。

1) 側面

尾方(2001)は、全体的な事態を立体的に捉えた場合、物事には別の側面があるという考え方から、「AもののB」における前件Aが、後件Bの一面である場合を「側面」の用法としている。

2) 側面的注釈

尾方(2001)は、「AもののB」における前件Aが、前項と同様な別情報としての価値を持ちながら、文脈の流れに沿った形で挿入される場合を「側面的注釈」としている。

3) 注釈

尾方(2001)は、「AもののB」における前件Aが、後件Bという事態を構成する一部に過ぎず、前件Aと後件Bが同値的な並立ではなく、前件Aが後件Bの従属的な位置にある場合は「注釈」の用法としている。

4) 表裏

尾方(2001)は、「AもののB」において前件Aと後件Bが1つの事態の裏表で

⁴ 尾方(2001)は「対照性」と「非順当性」について、次のように述べている。

逆接関係については様々な先行研究があるが、それらから抽出できる共通性は、典型的な逆接には「対照性」と「非順当」の二つがあるということである。「対照性」とは、前件と後件の内容的な不一致をいい、「非順当」とは、後件が前件から推論されることと一致しないことをいう。並立される二つの事態の関係の「対照性」と「非順当性」には濃淡があり、連続的ではあるが、それぞれの濃淡を「+」「-」とした十字分類が可能である。
(尾方2001) p.2,1.24-p.3,1.1

ある場合、前件 A と後件 B が 1 つの事態の理想と現実である場合を「表裏」の用法としている。

5) 留保

尾方 (2001) は、「A ものの B」において、後件 B の方が前件 A の注釈的位置にある場合を「留保」の用法としている。この場合、前に述べたことの認定に影響を与えることはなく、対照的あるいは非順当な価値を持つ情報を付加する用法としている。

以上をまとめると表-1 のようになる。なお各分類区分に併記した例文は、尾方 (2001) が先行研究などから引用している例文もある。

表-1 尾方 (2001) による接続助詞「ものの」の意味用法

	分類区分の項目	例文
2つの事態が同一平面上にある場合	「対照性 +」 「非順当性+」	・大学の英文科を卒業した <u>ものの</u> 、英語は全然話せない。 (尾方 2001) p.5.l.12
	「対照性 +」 「非順当性-」	・ダイヤはほぼ平常通りに回復した <u>ものの</u> 、混雑は依然として続いている。 (尾方 2001) p.5.l.6
	「対照性 -」 「非順当性+」	・日本には何度も来ている <u>ものの</u> 、まだ富士山を見ていない。 (尾方 2001) p.5.l.20
	「対照性 -」 「非順当性-」	・「旅館の予約は早くにした <u>ものの</u> 、まだ電車のきっぷは買っていない。」 (尾方 2001) p.6.l.17
2つの事態が同一平面上にない場合	側面	・見つかった手榴弾のようなものは、長さがおよそ 10 センチ、幅が 5 センチほどで、陸上自衛隊が詳しく調べた結果、表面がさびてかなり古いものではある <u>ものの</u> 、アメリカ軍の本物の手榴弾とわかりました。(NHK) (尾方 2001) p.6.l.24-p.7.l.2
	側面的注釈	・「悪気はなかったとはいう <u>ものの</u> 、あなたには申し訳ないことをしました」 (尾方 2001) p.7.l.13
	注釈	・「わずかではある <u>ものの</u> 、進歩が見られる。」 (尾方 2001) p.7.l.23
	表裏	・わたしが助けてあげたからいいような <u>ものの</u> 、あなた一人では助からなかったですよ。(外国人のための基本語用例辞典) (尾方 2001) p.8.l.2-3
	留保	・サッフォーの詩もいわばこうした水増しの御祝儀だったのではないだろうか。とはいう <u>ものの</u> 、彼女の詩は世界的傑作だそうである。(歴史を騒がせた女たち) ⁵ (尾方 2001) p.8, ll.15-17

尾方 (2001) に基づいて作表。表中の例文は尾方 (2001) が引用したものであり、二重下線は秦による。

2.1.2. 接続助詞「ものの」は逆接であるとする考え方

一方、中里（1996）は、接続助詞「ものの」は逆接の接続助詞であるとの立場を取り、4つの分類項目を掲げている。

1) 前件 A と後件 B が矛盾した事実関係にあるもの

中里（1996）は、前件 A と後件 B の関係から、まず、「A ものの B」における「A であれば、B ではないものだが、そうではなくて B だ」という意味関係を背景を持った用法を、「矛盾した事実関係」としている。

2) 前件 A と後件 B が対比の関係にあるもの

次に、「A ものの B」における「A ではあるが一方で B である」という関係を「対比の関係」として、3つの下位用法を掲げている。

(1) 1つの物事の二面を表す

前件 A と後件 B で1つの物事の2面（肯定的な面と否定的な面、表面と裏面）を表し、後件 B が強調され、前件 A は後件 B が成立する上で大した障害とはならないものとして示される、と述べている。

(2) 後件 B に前件 A と対照的な事柄を仮定

後件 B に、前件 A と対照的な事柄を仮定する用法であり、否定的な後件 B を想定することで前件 A を強調し、前件 A の有り難味を納得させるような言い方になるとしている。

(3) 前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定

前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定する用法であり、理想的な前件 A を想定することで、そうはいかなかった後件 B を強調する用法としている。

3) 後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる内容のもの

中里（1996）は、前件 A と後件 B のそれぞれの役割に着目し、「A ものの B」における後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる事柄や、順当な成り行き・実現を妨げられた結果⁶を表す用法がある点を指摘している。その際は、前件 A と後件 B は時間的前後関係が成り立つとしている。

4) 前件 A が後件 B の補足に、または後件 B が前件 A の補足になっているもの

前件 A と後件 B の双方がそれぞれ補足の役割を果たす用法であり、ある事柄を無条件に認めるのはためらわれ、「確かに・・・ではなるが」等の但し書きや、予想される反論などをあらかじめ付け加える働きがあるとしている。なお補足の対象により、以下の2つに分けられる。

(1) 前件 A が後件 B の補足

⁵ 出典は、永井路子（1978）『歴史を騒がせた女たち』文春文庫。なおこの用例は、中里（1996）も引用している。

⁶ 坪根（1996）は、接続助詞「ものの」は前件で示された状況下では「一般的に～だ」という期待があり、その期待に反した結果であることを後件が表す構文であると指摘している。

後件 B の内容に前件 A を補足する用法で、前件 A から予測される内容と反する事柄が後件 B にくる場合もあれば、単に前件 A が後件 B に条件を付ける場合もあるとしている。

(2) 後件 B が前件 A の補足

後件 B を、前文の補足説明として用いる用法で、「とはいうものの」を独立させて接続詞的に用いるとしている。

以上をまとめると表-2 のようになる。

表-2 中里 (1996) による接続助詞「ものの」の意味用法

分類区分の項目	例文
矛盾した事実関係	ダイヤはほぼ平常通りに回復した <u>ものの</u> 、混雑は依然として続いている。 ⁷ (中里 1996) p.99, ll.6-7
対比の関係 (1つの物事の二面)	このあたりは交通は不便な <u>ものの</u> 、緑が豊かで自然には恵まれている。 ⁸ (中里 1996) p.99, l.27-p.100, l.1
対比の関係 (後件 B に前件 A と対照的な事柄を仮定)	君だから許される <u>ものの</u> 、ほかの人だったらすぐ追い帰されてしまうよ。 ⁹ (中里 1996) p.100, ll.10-11
対比の関係 (前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定)	すぐに新しい委員を選べばいいような <u>ものの</u> 、それがなかなか難しいのです。 ¹⁰ (中里 1996) p.100, ll.22-23
後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる内容	大学には入った <u>ものの</u> 、授業についてゆくのは大変だ。(自然) ¹¹ (中里 1996) p.102, l.11
前件 A が後件 B の補足	景気のほうも、わずかではある <u>ものの</u> 回復に向かっていているようだ。 (中里 1996) p.103, ll.23
後件 B が前件 A の補足	サッフォーの詩もいわばこうした水増しの御祝儀だったのではないだろうか。とはいう <u>ものの</u> 、彼女の詩は世界的傑作だそうである。(歴史) ¹² (中里 1996) p.104, ll.5-6

中里 (1996) に基づいて作表。表中の用例は中里 (1996) を引用し、二重下線は秦による。

⁷ 出典は、佐竹 (1984)。

⁸ 出典は、佐竹 (1984)。

⁹ 出典は、佐竹 (1984)。

¹⁰ 出典は、佐竹 (1984)。なおこの用例は、尾方 (2001) も引用している。

¹¹ 出典は、桜井晴美 (1991) 『自然な日本語Ⅱ』凡人社。

¹² 出典は、永井路子 (1972) 『歴史をさわがせた女たち』文藝春秋。なおこの用例は、尾方 (2001) も引用している。

2.2. 本稿の立場

本稿では、まず逆接の本義を『日本語表現・文型事典』に求めた。

前件から予想される内容と異なる事態、意外な結果が生じたり、また、前件の事態にあえて反する動作・行為を行ったりして、前件と後件とが意味的に離反する関係にあるものを接続する表現。

『日本語表現・文型事典』 p.114, ll.5-7

次に本稿における接続助詞「ものの」の考え方を『日本文法大辞典』の記述に依拠した。

ある事柄の存在・成立などを一応は認めたとうえで、一方、それから予測される順当な帰結とは反する、あるいは、それとは相容れない事柄が存在・成立するという関係を表わす。

『日本文法大辞典』 p.855, 下段 ll.21-24

そして、前件と後件の関係表現に着目しながら両者を比較した場合、どちらも前件と後件の関係に相反的意味合いが見受けられる点を指摘していることから、本稿では接続助詞「ものの」は逆接である、とみなす立場を取った。更に、『日本文法大辞典』を引用している中里（1996）を本稿の分析・考察の基盤とした。

分析にあたっては、接続助詞「ものの」の使われ方を「典型的な逆接の用法」と「典型的な逆接とは異なる用法」に大別し、中里（1996）の4項目のうち「1）前件 A と後件 B が矛盾した事実関係にあるもの」と「2）前件 A と後件 B が対比の関係にあるもの」を「典型的な逆接の用法」とし、「3）後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる内容のもの」と「4）前件 A が後件 B の補足に、または後件 B が前件 A の補足になっているもの」は、「典型的な逆接とは異なる用法」とした。

3. 分析

3.1. 分析対象

3.1.1. パブリックコメント

分析資料としてパブリックコメントを用いる¹³。本稿で対象としたパブリックコメントのテーマは「福島原発の事故以降の政府のエネルギー・環境戦略」についてであり、今後の原子力発電所の在り方を選択形式で問うものである。選択肢は、原発ゼロ（脱原発シナリオ）、原発依存度 15%（原発増設可能シナリオ）、原発依存度 20～

¹³ 本稿では、政府の国家戦略会議（平成 23 年 10 月 28 日開催）において設置された「エネルギー・環境会議」が行ったパブリックコメントを対象とした。

25%（原発まい進シナリオ）の3つを提示して、2030年までの日本の原発のあり方について、3案から選択の上、意見を問うものであった。公募期間は平成24年7月2日～8月12日であり、寄せられた意見総数は88,454件となった。なお、男女の比率は男性0.48：女性0.52であった¹⁴。寄せられた意見は氏名等の個人情報削除されたのち、提出方法ごとに「整理番号」が付され、「個人／法人等」「職業」「年齢」「性別」「ご意見の概要」（原文ママ）「御意見及びその理由」（原文ママ）の各項目でネット上に公示される。¹⁵

本稿ではその中の「御意見及びその理由」（原文ママ）項目にある意見文のうち、「ものの、」を含む文を調査の対象とした。

3.1.2. 「ものの、」を含む文の抽出

総件数88,454件に対して「ものの、」で検索を行った。

「、」を入れた理由は、前件と後件の区別を抽出の段階から明示的に把握しておくためである。「、」を含まない「ものの」文も分析対象とした場合、その後前件と後件の区別を視認する作業が生じ、接続助詞以外の「ものの」の除去作業から誤作業を誘発しかねないからである。抽出データの人的判断による加工は極力行わないことで、分析精度を高めた。抽出件数は、263件を得た。

なお、この時点で、接続助詞でない「ものの」は目視により排除してある。また1つの意見文の中に接続助詞「ものの」が複数ある場合は、それぞれを1件としてカウントする。

3.2. 分析手法

本稿では接続助詞「ものの」の考え方を『日本文法大辞典』の記述に置くことから、『日本文法大辞典』の記述に則った使われ方を「典型的な逆接の用法」とする。

『日本文法大辞典』の記述は、前件Aと後件Bの関係について2つのパターンを挙げている。表-3

表-3 典型的な逆接の用法

ある事柄の存在・成立などを一応は認めたくえて、一方、それから予測される順当な帰結とは反する事柄が存在・成立するという関係を表わす。
ある事柄の存在・成立などを一応は認めたくえて、一方、それとは相容れない事柄が存在・成立するという関係を表わす。

『日本文法大辞典』 p.855, 下段 11.21-24 の記述を基に作表

¹⁴ 男女の実数は、男性42,004件、女性44,044件であった。なお、合計数が総数と一致しないのは、無回答や「法人等」で回答したケースがあるためである。

¹⁵ 意見提出者は、「年齢」では10代～80代の中から選択し、「職業」では「会社員」「公務員」「学生」「家事専業」「自営業」「無職」「パート・アルバイト」の中から選択する。

中里（1996）は論文の中で、『日本文法大辞典』の記述を引用しつつも「この解説だけでは「ものの」の意味用法を説明するのは無理がある」という言い方で、『日本文法大辞典』の記述に基づく用法では分類しきれない用法の存在を指摘している。

そこで本節では、まず中里（1996）の用法から『日本文法大辞典』の記述に該当する用法を確認し、次に中里（1996）の用法から『日本文法大辞典』の記述では分類しきれない用法について確認して本稿の分類項目を確立する。

3.2.1. 分類項目

中里（1996）の4項目の用法は、前件 A と後件 B の関係に着目した用法と、前件 A または後件 B のそれぞれの役割に着目した用法とに分けられる。表-4.1 表-4.2

表-4.1 中里（1996）の意味用法のうち前件 A と後件 B の関係に着目した分類区分

分類項目
矛盾した事実関係
対比の関係（1つの物事の二面を表す）
対比の関係（後件 B に前件 A と対照的な事柄を仮定）
対比の関係（前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定）

表-4.2 中里（1996）の意味用法のうち前件 A または後件 B の役割に着目した分類区分

分類項目
後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる事柄
後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる結果
前件 A が後件 B の補足
後件 B が前件 A の補足

このうち、前件 A と後件 B の関係に着目した表-4.1 は、『日本文法大辞典』の記述表-3 に対応することから、本稿ではこの表-4.1 を「典型的な逆接の用法」と定めた。両表を対応させたものが表-5 である。

表-5 典型的な逆接の用法（表-4.1 と表-3 を対応）

表-4.1				表-3			
矛盾した事実関係				ある事柄の存在・成立などを一応は認めたとうえで、一方、それから予測される順当な帰結とは反する事柄が存在・成立するという関係を表わす。			
対比の関係（1つの物事の二面を表す）				=			
対比の関係（後件 B に前件 A と対照的な事柄を仮定）				ある事柄の存在・成立などを一応は認めたとうえで、一方、それとは相容れない事柄が存在・成立するという関係を表わす。			
対比の関係（前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定）							

次に、『日本文法大辞典』の記述だけでは説明しきれない用法を本稿では「典型的な逆接とは異なる用法」とし、表-4.2 がこれに該当する。

表-4.2 は、前件 A と後件 B の役割が混在していることから、表-6 のように整理する。

表-6 典型的な逆接とは異なる用法（表-4.2 を整理）

分類項目	
前件 A が後件 B の補足	後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる事柄
	後件 B が前件 A の順当な成り行きを妨げる結果
	後件 B が前件 A の補足

以上、表-5 と表-6 をまとめて、本稿が用いる分類の枠組みとする。表-7

なお表記上、「前件 A が後件 B の補足」は「補足（A 補足・B）」に、「後件 B が前件 A の補足」は「補足（A・B 補足）」に、「対比の関係（1つの物事の二面を表す）」は「対比の関係（二面）」に、「対比の関係（後件 B に前件 A と対照的な事柄を仮定）」は「対比の関係（A・B 仮定）」に、「対比の関係（前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定）」は「対比の関係（A 仮定・B）」にそれぞれ省略して以後表記する。

表-7 本稿で用いる分類項目

典型的な逆接の用法				典型的な逆接とは異なる用法			
				前件		後件	
矛盾した 事実関係	対比の関係 (二面)	対比の関係 (A・B 仮定)	対比の関係 (A 仮定・B)	補足 (A 補足・B)	順当な成り行き を妨げる事柄	順当な成り行き を妨げる結果	補足 (A・B 補足)

3.2.2. 分類項目の指標

本節では、分類にあたっての項目間の相違を確認する。

1) 本稿における「矛盾した事実関係」と「順当な成り行きを妨げる事柄／結果」の相違

本稿では、一般的な概念とされる社会的な常識や文化的な背景¹⁶に照らして、前件の内容から自然に想定される内容とは異なる内容が後件に来た場合に「矛盾した事実関係」に該当すると位置付ける。一方、「順当な成り行きを妨げる事柄／結果」には前件と後件の間に矛盾は存在せず、後件は前件の出来事の次に出現したに過ぎず¹⁷、後件の内容に着目した用法である。

本稿では、前件から展開された後件との間に矛盾が存在しているかどうか、を相違の境界とした。以下に「矛盾した事実関係①④」「順当な成り行きを妨げる事柄②⑤」「順当な成り行きを妨げる結果③⑥」の作例を示す。

作例① 志望校に合格したものの、入学を取り消された。

作例② 志望校に合格したものの、父親が失業した。

作例③ 志望校に合格したものの、就職した。

作例④ 手術は成功したものの、主治医はそのことを知らなかった。

作例⑤ 手術は成功したものの、メスが一本見つからない。

作例⑥ 手術は成功したものの、体重が増えない。

作例①では、入学を前提に志望校が合格を発表したにもかかわらず、その入学を取り消したという点に矛盾が生じている。一方、作例②と作例③では、志望校合格後は入学が次の展開となるどころ、父親の失業から入学が危ぶまれる事象が発生した点、入学せずに就職したという結果が生じた点から、3者の意味用法は明らかに異なる。

作例④作例⑤作例⑥では、患者に対して責任ある立場の主治医が知らないところで手術が行われていたという矛盾と、手術後に発覚したメスの紛失により手術の成功が危ぶまれる事象の発生、手術成功後の快復の日安となる体重が一向に増えていないという結果から、3者の意味用法は異なる。

2) 本稿における「対比の関係」の下位項目の相違

中里（1996）は、接続助詞「ものの」の対比の関係として、前件 A と後件 B が一

¹⁶ 本稿で述べたこれらの背景を、西原鈴子（1985）は、話者が前提概念とする「信条、通念、常識」の集積としての「ナチュラルなロジック」と述べている。

¹⁷ 中里（1996）は、このことを「時間的前後関係」と表現している。

つの物事の二面を表す場合、前件 A に後件 B と対照的な事柄を仮定する場合、後件 B に前件 A と対照的な事柄を仮定する場合、の 3 つを掲げている。

この 3 つの用法に共通していることは、表-5 に見られるように「相容れない事柄」の存在または成立である。本稿では、この存在または成立が仮定として前件または後件に現われているのか、2 面の 1 つとして現れているのか、を相違の境界とした。

作例⑦ 社長は温厚であるものの、豪腕である。

作例⑧ 社長だからその事業は成功したものの、副社長だったら失敗しただろう。

作例⑨ 社長が取り組めばいいようなものの、副社長がその事業を担当した。

作例⑦では、社長という一人の人物像の中で、温厚な部分と正反対な剛腕な部分の共存を示している用法である。作例⑧では、実際に事業を成功させたのは社長であるが、もし副社長が取り組んでいたら、という仮定を後件にもってきている用法であり、作例⑨では前件に社長が取り組むことを仮定した使われ方をしている。

3) 本稿における「補足」の着目点

中里 (1996) は、「補足」の用法を、ある事柄を無条件に認めるのをためらう時に使われる用法としており、「確かに・・・ではある (あった) が」「もちろん・・・なのだが」といった但し書きや、予想される反論などをあらかじめ付け加える際に現われるとしている。また、「A とはいうものの」の形式が用いられる点も指摘している。分類の指標は、中里 (1996) が指摘する「確かに」¹⁸「もちろん」といったキーワードとともに、「予想される反論」が出現しているかどうか、筆者の意見を展開するにあたって譲歩的な内容が示されているかどうかに着目する。

典型的な用例として、調査対象の資料から以下を紹介する。なお、引用文中の波線と一重下線は秦による。

さらに、確かに日本はエネルギー自給率が低いものの、これは憲法九条と全く同じ構造の話であって、簡単に「だから原発を維持しろ！」ですむ話ではないと思う。

(意見番号 57710)

再生可能エネルギーについての不安はもちろんあるものの、経済的な面からも推進するメリットは大きいと思われるため、拡大を支持する。

(意見番号 16198)

以上、分類項目の枠組みをまとめると表-8 となる。

なお、分類項目ごとに作例を付し、項目間の相違を明確にした。

¹⁸ 「確かに」については、伊集院 (2010) が日本語学習者に譲歩構造を指導するための基礎調査として、日本語母語話者の意見文 134 編を対象に分析を行っている。

表-8 分類の指標

分類項目		指標となる考え方	作例
矛盾した事実関係		一般概念に照らして矛盾を認める。	冷蔵庫にビールを入れたものの、冷えていなかった。
対比の関係 (二面)		AとBの内容は時間的には同時に起こっている事柄である。 ・肯定的な面と否定的な面、表面と裏面。 ・後件Bが強調され、前件Aは後件Bが成立する上で大した障害とはならないものとして示される。	太郎は痩せているものの、力持ちである。
対比の関係 (A・B 仮定)		AとBの内容は時間的には同時に起こっている事柄である。 ・否定的な後件Bを想定することで前件Aを強調し、前件Aのありがたみを納得させるような言い方になる。 「・・たからいいようなものの」 「・・たからよかったようなものの」	太郎だから運べるものの、次郎ではギックリ腰になるだろう。
対比の関係 (A 仮定・B)		AとBの内容は時間的には同時に起こっている事柄である。 ・理想的な前件Aを想定することで、そうはいかなかった後件Bを強調している。 「・・ばいいようなものの」	太郎に頼めばいいようなものの、次郎が運ぶことになった。
前件	補足 (A 補足・B)	「確かに／もちろん・・・ではあるが」 「とというものの」 ・ある事柄を無条件に認めるのはためらわれ、但し書きや、予想される反論などをあらかじめ付け加える用法。 ・後件Bの内容に前件Aを補足するもの ・前件Aから予測される内容と反する事柄が後件Bにくる場合もあれば、単に前件Aが後件Bに条件を付けるものである場合もある。	少しずつではあるものの、血圧は下がってきている。
後件	順当な成り行きを妨げる事柄	時間的前後関係が成り立つ。 BはAに対して否定的な内容となっている。 「・・は」「・・はしたものの」「・・てみた」「・・てはみた」「・・みるものの」	冷蔵庫にビールを入れたものの、妻に見られた。
	順当な成り行きを妨げる結果	時間的前後関係が成り立つ。 BはAに対して否定的な内容となっている。 「・・は」「・・はしたものの」「・・てみた」「・・てはみた」「・・みるものの」	冷蔵庫にビールを入れたものの、妻に飲まれた。
	補足 (A・B 補足)	「とというものの」 ・「とというものの」を独立させて接続詞的に用いると、前文（前件Aにあたる）だけでは説明が足らず誤解されそうなことを、後件Bとして、補足説明する働きがある。	血圧は下がってきている。とというものの、標準値には程遠い。

中里（1996）を基に作表

4. 分類結果と考察

4.1. 意味用法別の使用実態

分類の集計結果は、以下のとおりとなった。

表-9 分類集計結果

分類項目 1	分類項目 2		分類項目 1 合計	分類項目 2 合計
典型的な逆接の 用法	矛盾した事実関係		29 件	13 件
	対比の関係 (二面)			15 件
	対比の関係 (A・B 仮定)			1 件
	対比の関係 (A 仮定・B)			0 件
典型的な逆接と は異なる用法	前 件	補足 (A 補足・B)	226 件	146 件
		順当成り行き妨げる (事柄)		7 件
	後 件	順当成り行き妨げる (結果)		68 件
		補足 (A・B 補足)		5 件
分類不能				8 件

分類の結果から、今回の資料においては「典型的な逆接の用法」は 29 件で、あまり使われていないことがわかった。むしろ「典型的な逆接とは異なる用法」が 226 件と大半を占め、全体の約 86% に至ることがわかった。更にその中でも「前件 A が後件 B の補足」とする使われ方が 146 件で最も多く、分析対象全体の約 56% を占めるという結果になった。

また、典型的な逆接として使われる中でも、「対比の関係 (A 仮定・B)」は全く使用されておらず、「対比の関係 (A・B 仮定)」は以下の 1 件であった。

福島第一発電所は何とか抑え込んでいるものの、空中に浮かんでいる状態の 4 号機プールが破損し水が漏れ出し使用済み核燃料がまた燃え始めると、もう誰も近づけなくなりチェルノブイリの 87 倍とも言われる核物質が飛散します。(意見番号 17296)

一方、146 件と使われ方の多かったのは「補足 (A 補足・B)」であるが、これは、筆者の意見を展開する際に、異なる意見を一旦譲歩的に認めることで、より筆者の主張に説得力をもたらす戦略的な背景があると予想できる。なお、この意味用法の使用の特徴として、「多少」「若干」「一時的」など制限付きの量や程度を表す語句との共

起が見受けられた。¹⁹

4.2. 分類不能

分類の結果、意味用法が確定できないものが8件発生した。

これら8件は、辞書や文法書、先行研究のどれにも当てはまらない用法という意味で、規範から逸脱した用法であるとみなし、本稿では以後「逸脱」と表記する。

以下に、当該文と前後の文脈²⁰、逸脱と分類した理由を述べ、これらの接続助詞「ものの、」の働きについて考察する。なお、引用文中の二重下線は秦による。

(逸脱1)

あなた達の意図とは逆の意味でインターネット上で回覧が回っているからこのことを知ったものの、まるでやっていることがわかりません。(意見番号4490)

前件の文意からは「対比の関係 (A・B 仮定)」に近似するが、後件の文意が仮定ではないことから逸脱に至った。前後の文脈は以下のとおりである。

そして、このパブリックコメントの求め方も間違っている。こっそりとホームページに気づかないように載せて、なるべく意見が集まらないようにして、なおかつアライバイ作りをしているようにしか見えない。どうして、もっと公の場に意見を求めているという意思を伝えようとしなのか。あなた達の意図とは逆の意味でインターネット上で回覧が回っているからこのことを知ったものの、まるでやっていることがわかりません。テレビやラジオや新聞で取り上げてもらうなり、広める努力を怠らないでください。(意見番号4490)

意見者の主張は後件にあり²¹、前件では意見者の実体験を交えたパブリックコメントの公募の実態を述べている。後件の主張が意見者の実体験から導かれた評価である点を考えると、前件はその評価へ至る過程を述べている²²。本稿では、接続助詞「ものの」を含むこのような前件に、後件に至る過程を提示する前置き²³の要素が包含

¹⁹ 関連する先行研究としては、丹羽 (1996) が接続助詞「ものの」の程度量を表す意味用法を指摘している。

²⁰ 伊丹 (2000) は、接続助詞「ものの」の意味や用法を考える際に、「ものの」を含む一文だけを取り出して、前件と後件の関係を分析するだけでは不十分と指摘している。

²¹ 佐竹 (1984) は、接続助詞「ものの」の特徴として、前件と後件を同じ重みで対比的に扱うのではなく、重点は後件にあると述べている。また、石黒 (1999) も、逆接の基本的性格として「後件比重性」を指摘している。

²² 池上 (1997) は、接続助詞「ものの」の性質として前件・後件の内容をプラス (+) マイナス (-) またはマイナス (-) プラス (+) の評価で捉えることができる点を指摘している。(逸脱1) の文はこの性質にも該当しない。

²³ 本稿では、前置きという語句を使うにあたって、山下 (2000) の先行研究を参考にした。山下 (2000) は前置きについて、「主に意見記述部の直前に位置し、意見提示が円滑に行われるために機能する表現」と定義付け、機能別に「説得の準備」「書き手の謙遜する態度の表示」「意見記述の整理」の3つに分類している。山下 (2000) は「意見記述の整理」の機能として「意見の前触れやメタ言語を用いて読み手の理解の補助を行う」ことを挙げていることから、(逸脱1) に用いた。

されていると分析した。

(逸脱 2)

今回の3案のひとつに決定すると明言はされていないものの、8月に下す決定の内容と、その決定が将来に及ぼす影響や拘束力が不明である。(意見番号 4525)

前件の文意からは「補足 (A 補足・B)」に近似するが、接続助詞「ものの」には、後件の展開に向けた但し書き的な要素や、あらかじめ想定され得る反論を紹介するといった働きはないことから逸脱に至った。前後の文脈は以下のとおりである。

3つの選択肢の背景 (たとえば原発比率 15%というのは、具体的にどのような移行シナリオなのか? 新設するのかもしれないのか? しないなら 40 年廃炉をどの原発でどこまで延長するのか?) などに関する情報がとても不足しているし、広く国民に伝える努力も足りない。また選択肢が極端すぎて {原発ゼロだと CO₂ 排出は不可避。そうでない選択肢があるはず} 恣意的である。今回の3案のひとつに決定すると明言はされていないものの、8月に下す決定の内容と、その決定が将来に及ぼす影響や拘束力が不明である。ひとことで言えば、これほど短期的にも長期的にも国の有り方を根本から問う重要テーマを、こんな不十分な環境で決めることに激しい違和感がある。(意見番号 4525)

意見者は、先行文脈で3つの選択肢に係わる情報不足を訴え、続く接続助詞「ものの」を含む前件でも、3案からの決定の明言がない事実を述べている。しかし続く後件では、決定内容と将来に及ぼす影響という内容になり、前件とは異なる観点から意見が展開されている。「対比の関係 (二面)」に見られる相反性はなく、前件と後件の関係が希薄なことから、本稿では話題の転換をはかる要素を含む使われ方と分析した。

(逸脱 3)

夏の電力消費ピークがこれからというものの、去年の夏はのりきれています。(意見番号 19249)

分類上は「順当な成り行きを妨げる結果」に近似するが、前件と後件の時間的前後関係が逆行していることから逸脱とした。前後の文脈は以下のとおりである。

現在、大飯原発を除くすべての原発が稼働していないにもかかわらず、どこも停電という事態には陥っていません。

夏の電力消費ピークがこれからというものの、去年の夏はのりきれています。

この夏は現時点で、電力の最大消費地の首都圏への供給に原子力による電気は予定されていないと理解しています。

ガスコンバインドという方法で、原子力発電所の発電分を補っていると聞きました。2030 年よりも早くに原発依存をゼロにすることは十分に可能に思います。

接続助詞「ものの」を含む前件は、後件に続く後続文に続けることも可能である。

「夏の電力消費ピークがこれからというものの、(去年の夏はのりきれています。)
この夏は現時点で、電力の最大消費地の首都圏への供給に原子力による電気は予定
されていないと理解しています。」

このことから、接続助詞「ものの」を含む前件が、後件を挿入的に位置付ける要素
が見受けられる使われ方と分析した。

(逸脱 4)

福島原発事故はあったものの、私たちの生活の基盤となる安価で安定的な電力供給と温
暖化ガス削減による地球環境保護のためにも一定の原子力発電による電力供給量は必要だ
と思う。(意見番号 20813)

分類上は「補足 (A 補足・B)」に近似するが、後件を内容的に補足するほどの貢
献性はないことから逸脱に至った。接続助詞「ものの」を含む前件がこの意見文の書
き出しにあたることから、後続の文を以下に記す。

福島原発事故はあったものの、私たちの生活の基盤となる安価で安定的な電力供給と温
暖化ガス削減による地球環境保護のためにも一定の原子力発電による電力供給量は必要だ
と思う。既存の原子力発電所の安全向上を図りながら、長期的にエネルギー供給バランス
の最適化を図っていくべきである。(意見番号 20813)

福島原発事故が起きたことに対する筆者の意見が、後件および後続の文で述べられ
ている。接続助詞「ものの」を含む前件には、これから述べる後件や後続文で扱われ
る内容の話題を、事前に提示している働きが見受けられた。

(逸脱 5)

福島事故が発生したものの、これを機会と捉え改革を重ねることで安全確保は可能と考
えており、原子力をエネルギー・ミックスに織り込むべきである。(意見番号 28202)

分類上は「補足 (A 補足・B)」に近似するが、後件を内容的に補足するほどの貢
献性はないことから逸脱に至った。前後の文脈は以下のとおりである。

電力の安定供給はその礎であり、電力供給が崩れることはこの輸出 / 輸入のサイクルの

崩壊につながり、ひいては、エネルギー危機、食料危機につながる。

福島事故が発生したものの、これを機会と捉え改革を重ねることで安全確保は可能と考えており、原子力をエネルギー・ミックスに織り込むべきである。

なお、福島事故、特に爆発に至る経緯や国民からの信頼の失墜は、明らかに電力会社および規制当局の「マネジメントの欠如」が原因であり、原子力運営組織および規制当局には大きな意識改革、文化改革が必要である。(意見番号 28202)

後件では、福島事故が発生したことに対する筆者の意見が述べられており、続く後続文でも筆者の主張が続いている。接続助詞「ものの」を含む前件は、後件や後続文で扱われる内容の話題を事前に提示していることから、(逸脱 4)と同様の働きが接続助詞「ものの」に見受けられた。

(逸脱 6)

将来の化石燃料の枯渇は避けられないものの、他の代替エネルギーを模索すべき。(意見番号 33726)

分類上は「補足 (A 補足・B)」に近似するが、後件は筆者の主張であることから、前件との関連は希薄であることから逸脱とした。前後の文脈は以下のとおりである。

現時点では電力不足ではない。

将来の化石燃料の枯渇は避けられないものの、他の代替エネルギーを模索すべき。

電気エネルギーばかりに頼るのは、バランスを欠く危険な選択である。(意見番号 33726)

接続助詞「ものの」を含む前件は、後件に続く後続文に続けることも可能である。

「将来の化石燃料の枯渇は避けられないものの、(他の代替エネルギーを模索すべき。)電気エネルギーばかりに頼るのは、バランスを欠く危険な選択である。」

このことから、接続助詞「ものの」を含む前件が、後件を挿入的に位置付ける要素が見受けられる(逸脱 3)と同様の使われ方と分析した。

(逸脱 7)

震災により原発の重大事故はあったものの、もとは、政府の対応がまずかったためで、原発をその様におそろしいものと考えたりせず、むしろ対応の悪さにこそ、問題があったと考えている。(意見番号 FAX17720)

前件からは分類上「補足 (A 補足・B)」とうかがえるが、後件に対する補足的な貢献は見受けられないことから、逸脱とした。接続助詞「ものの」を含む前件が意見

文の書き出しであることから、後続文を以下に示す。

震災により原発の重大事故はあったものの、もとは、政府の対応がまずかったため、原発をその様におそろしいものと考えたりせず、むしろ対応の悪さにこそ、問題があったと考えている。

原発は、日本のエネルギー給源として絶対必要であり、人々の生活や安全、生命を守るために絶対必要な、エネルギーだと思ふ！！
(意見番号 FAX17720)

後件ならびに後続文では、原発の重大事故があったことに対する検証と筆者の意見が述べられており、前件では原発の重大事故が起きたことのみが述べられている。接続助詞「ものの」を含む前件が、これから述べる後件や後続文で扱われる内容の話題を事前に提示していることから（逸脱4）（逸脱5）と同様の使われ方と見受けられる。

（逸脱8）

ウラン採掘地の惨状は、未だ誰も見た事も聞いた事もない新生児と死産の多発に始まり、「押し込められた居留置」の「先住民の男達」は突如湧いた新しい仕事についたものの、40才以上は一人もいない。
(意見番号 郵送468)

分類上は「順当な成り行きを妨げる結果」に近似するが、新しい仕事につけることと年齢との関係は希薄なことから、逸脱とした。当文が意見文の書き出しであることから、後続文を以下に示す。

ウラン採掘地の惨状は、未だ誰も見た事も聞いた事もない新生児と死産の多発に始まり、「押し込められた居留置」の「先住民の男達」は突如湧いた新しい仕事についたものの、40才以上は一人もいない。

皆ガン死人達という、あるべからざる悲惨の上で始まった核開発の歴史、ヒロシマ、ナガサキを経験し乍ら、「東西冷戦」の狭間で憂慮する人々を切り捨て、「平和利用」のかけ声で、国民を洗脳してきた「中曽根康弘」元首相らは、未だ何一つ、その反省もなく、地震帯上に原発を林立させ、ついに、3.11 フクシマの世界最大の核事故を招いたのは、実に重大な誤ちであり、一刻も早く脱原発転換なくば未来なし。
(意見番号 郵送468)

第一段落では、奇形児や死産の多発と40才以上は生存しないことを中心に述べ、ウラン採掘地の惨状について述べている。一方、突如湧いた新しい仕事につくという内容は、文脈全体においては補足的な情報と捉えられる。従って、接続助詞「ものの」を含む前件は、文脈全体における傍流の情報を挿入する使われ方と分析した。

以上をまとめると、接続助詞「ものの」の使われ方には、従来示されてきた使われ方の他に、前置きの要素（逸脱1）、話題転換の要素（逸脱2）、後件を挿入的に位置

付ける要素（逸脱 3・6）、話題提示の要素（逸脱 4・5・7）、傍流の情報挿入の要素（逸脱 8）など、規範的な用法から逸脱した使われ方も散見されたことから、新たな用法が存在する可能性があることがわかった。

5. おわりに

本研究では、接続助詞「ものの」が持つ意味用法のうち、典型的な逆接とは異なる意味用法に着目しながら、現代の日本語母語話者が使う接続助詞「ものの」の使用実態を分析した。

その結果、分析対象の意見文においては、「典型的な逆接とは異なる用法」の使われ方が全体の約 86%（226 件）を占めていたこと、その中でも、「前件 A が後件 B の補足」の使われ方が 146 件（約 64%）で最も多かったことがわかった。

また、指標では分類できなかった使われ方が 8 件見つかり、考察の結果、①前置き、②話題の転換、③後件を挿入的に位置付ける、④話題の提示、⑤傍流の情報挿入、などの要素が包含される使われ方が見受けられ、規範的な用法からの逸脱が確認された。

このことから本研究では、今回調査対象とした資料においては、

- ・ 意見文における接続助詞「ものの」の使い方として、「典型的な逆接とは異なる用法」が多く使用されていること。
- ・ 従来示されてきた接続助詞「ものの」の用法とは異なる使われ方が存在している可能性があること。

の 2 つの知見を得ることができた。

本稿は、接続助詞「ものの」は逆接の表現であるとの立場に立って研究を展開したが、逆接そのものの本質を見通すまでには至っていない。

今後は、本研究で用いた分類の指標を用いて、逆接の表現と言われる他の接続助詞についてさらに分析と考察を行いたい。

引用文献

- 池上素子（1997）「「のに」・「ながら」・「ものの」・「けれども」の使い分けについて」『北海道大学留学生センター紀要』（1）pp.18-38 北海道大学学術成果コレクション
- 石黒圭（1999）「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』（198）pp.129-114 1999-09 国語学会
- 伊集院郁子（2010）「意見文における譲歩構造の機能と位置—「確かに」を手がかりに—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』（2）pp.101-110 アカデミック・ジャパニーズ研究会
- 伊丹千恵（2000）「「ものの」の意味と用法について」『東京外国語大学留学生日本語

- 教育センター論集』(26) pp.231-290 東京外国語大学
- 尾方理恵(2001)「『ものの』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(27) pp.1-15 東京外国語大学
- 佐竹久仁子(1984)「～もので／～ものの／～ものを」『日本語学』(10) pp.89-96 明治書院
- 坪根由香里(1996)「終助詞・接続助詞としての「もの」の意味—「もの」「ものなら」「ものの」「ものを」—」『日本語教育』(91) pp.37-48 日本語教育学会
- 中里理子(1996)「『ものの』の意味・用法について」『東京大学留学生センター紀要』(6) pp.95-109 東京大学
- 西原鈴子(1985)「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』(56) pp.28-38 日本語教育学会
- 丹羽哲也(1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『大阪市立大学文学部紀要』(50) pp.743-777 大阪市立大学
- 森田良行／松木正恵(1989)『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』まえがき p. i アルク
- 山下みゆき(2000)「日本語学習者の前置き表現の使用の実態～課題に基づく意見文より～」『報告書(2000)』 pp.210-218 国立国語研究所日本語教育センター
- 小池清治／小林賢次／細川英雄／山口佳也 編(2002)『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 松村明 編(1994)『日本文法大辞典』明治書院
- 山口明穂／秋本守英(2001)『日本語文法大辞典』明治書院

参考文献

- 石黒圭(2004)『よくわかる文章表現の技術Ⅱ』明治書院
- 石黒圭(2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 伊集院郁子／高橋圭子(2012)「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—「主張」に着目して—」『日本語・日本学研究』2pp.1-15
- 磯貝芳郎／本田時雄 編(1979)『情報と人間』福村出版株式会社
- 市川孝(1990)『文章表現法』明治書院
- 伊藤晃(2010)『談話と構文』大学教育出版
- 今尾ゆき子(1994)「条件表現各論ガ／ケレド／ノニ／クセニ／テモ 談話語用論からの考察」『日本語学』(8) pp.92-103 明治書院
- 上林洋二(1994)「条件表現各論カラ／ノデ」『日本語学』(8) pp.74-80 明治書院
- 大野晋 編(2012)『古典基礎語辞典』角川学芸出版
- 岡野ひさの(2007)「いわゆる逆接のノニは何を表すか」『日本語文法』(7) 1pp.69-

87 日本語文法学会くろしお出版

- 尾方理恵 (2000) 「「ものだ」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 (26) pp.1-17 東京外国語大学
- 夏瑞紅 (2008) 「複合辞の意味用法に関する一考察：因果関係と逆関係を表す複合接続助詞を中心に (日中韓 3 か国合同ジョイントゼミ (北京))」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』 pp.198-201 (<http://hdl.handle.net/10083/35146>) お茶の水大学
- 樺島忠夫 (1979) 『日本語のスタイルブック』 大修館書店
- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』 (55) P9-19
- 衣畑智秀 (2003) 「ノニ、クセニ、ニモカカワラズ」『日本語文法』 (3) 1pp.3-18 日本語文法学会くろしお出版
- 工藤嘉名子／伊集院郁子 (2013) 「超級学習者の意見文における「譲歩」の論理性」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 39pp.1-15 東京外国語大学
- 小泉保 (1987) 「譲歩文について」『言語研究』 (91) pp.1-14 日本言語学会
- 佐伯梅友 (1953) 「接続助詞「ものの」と「が」とについて」『金田一博士古稀記念言語・民族論叢』 pp.395-414 三省堂出版
- 坂原茂 (1985) 「日常言語の推論」『東京大学出版会』 東京大学出版会
- 佐竹久仁子 (1986) 「「逆接」の接続詞の意味と用法」『論集 日本語研究』 (一) pp.162-185 明治書院
- 白川博之 監修、庵功雄／高梨信乃／中西久美子／山田敏弘 著 (2010) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 鈴木義和 (1994) 「条件表現各論バ／ト／タラ／ナラ」『日本語学』 (8) pp.81-91 明治書院
- 高崎みどり／立川和美 編 (2008) 『ここからはじまる文章・談話』 ひつじ書房
- 高崎みどり／立川和美 編 (2010) 『ガイドブック文章・談話』 ひつじ書房
- 高橋太郎 (2008) 『日本語の文法』 ひつじ書房
- 竹内啓 編 (1988) 『シリーズ・人間と文化 2 意味と情報』 東京大学出版会
- 田代ひとみ (2007) 「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』 14pp.131-144
- 田中一 (1994) 『情報とは何か』 新日本出版社
- 田中寛 (1994) 「条件表現と基本文型」『日本語学』 (8) pp.60-72 明治書院
- 田中寛 (1998) 「「テモ」の周辺「テデモ」をはじめとして」『早稲田大学』 pp.41-62 早稲田大学
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』 ひつじ書房
- 田辺和子 (2000) 「接続助詞「ものの」の文法化に伴う譲歩的意味の創出について」『日本女子大学紀要文学部』 pp.101-114 日本女子大学

- 田辺和子 (2005) 「接続助詞「ものの」における「文法化」と「語用化」『国文目白』 pp.54-67 日本女子大学
- 田野村忠温 (2004) 「周辺性・例外性と言語資料の性格」『日本語文法』(2) pp.24-37 日本語文法学会くろしお出版
- 角田三枝 (2011) 「モノノとナイマデモー節接続の五つのレベルにおける逆接と譲歩条件ー」『国立国語研究所論集』2pp.107-134 2011 国立国語研究所
- 戸村佳代 (1989) 「日本語における二つのタイプの譲歩文「ノニ」と「テモ」『文藝言語研究言語篇』15pp.123-133 1989-00-00 筑波大学
- 中右実 (1994) 「日英条件表現の対照」『日本語学』(8) pp.42-51 明治書院
- 中里理子 (1997) 「逆接確定条件の接続助詞 ガ・ノニ・モノノ・テモ・ナガラについて (平田悦朗先生退官記念号)」『言語文化と日本語教育』 pp.160-170 (<http://hdl.handle.net/10083/50232>) お茶の水大学
- 中溝朋子 (2002) 「いわゆる逆接のケドとノニの互換性について」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』 pp.87-96 大分大学
- 中溝朋子 (2002) 「ノニについて接続的用法と副詞的用法」『日本語教育』(114) pp.20-29 日本語教育学会
- 長坂水晶 (1995) 「日本語の文章における冒頭文の特徴」『第8回日本語教育連絡会議報告発表論文集』 pp.125-136 第8回日本語教育連絡会議事務局
- 仁田義雄 (1987) 「条件づけとその周辺」『日本語学』(9) pp.13-27 明治書院
- 仁田義雄 編 (1995) 『複文の研究 (上)』くろしお出版
- 仁田義雄 編 (1995) 『複文の研究 (下)』くろしお出版
- 仁田義雄 (2004) 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 野田尚史 (1994) 「仮定条件のとりたて「～ても」「～ては」「～だけで」などの体系」『日本語学』(8) pp.34-41 明治書院
- ハリディ／ハサン 著 (1997) 『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房
- 日野資成 (2001) 『形式語の研究文法化の理論と応用』九州大学出版会
- 松岡弘 監修、庵功雄／高梨信乃／中西久美子／山田敏弘 著 (2010) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 前田直子 (1994) 「条件表現各論テモ／タッテ／トコロデ／トコロガ」『日本語学』(8) pp.104-113 明治書院
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文』くろしお出版
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』(2) pp.27-52 早稲田大学
- 森田良行／松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 山内洋一郎 (1970) 「が・に・を・ものから・ものの・ものを<から><ので><の

- に>」『国文学解釈と鑑賞』 pp.61-66 至文堂
- 山口堯二（1994）「条件表現の起源」『日本語学』（8） pp.18-25 明治書院
- 山梨正明（1994）「条件文の表現機能と言葉の認識」『日本語学』（8） pp.4-17 明治書院
- 横林宙世／下村彰子（1996）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6 接続の表現』 荒竹出版
- 吉川武時 編、小林幸江／柏崎雅世 他（2003）『形式名詞がこれでわかる』 ひつじ書房
- 渡部学（2001）「接続助詞の語彙的な意味と文脈的な意味クセニとノニの記述と分析を巡って」『日本語科学』（10） pp.34-54 国立国語研究所

2013年秋学期 博士後期課程（博士）修了論文

2014. 3. 31

	専攻	学位授与者	博士論文題目	指導教授
1	開発問題専攻	関口 美緒	日本語心理動詞の研究－生理的・心理的現象から言語表現までを考える－	今泉 喜一
2	開発問題専攻	SELO YUDIBRATA	観光開発が住民の生活環境と健康に及ぼす影響－インドネシア Kampung Dukuh 現地調査による考察－	出嶋 靖志

2013年秋学期 博士前期（修士）課程修了論文

2014. 3. 31

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	楊 玉敏		中国のFTA戦略の課題と展望 「日中韓FTAの可能性を探る」	馬田 啓一
2	叶 佳綾	※	企業倫理と風土の変革 －雪印乳業と不二家の不祥事の実例から－	田中 信弘
3	翟 恒強		日本語学習者のアクセントの産出傾向における問題点－中国語北方方言を母語とする日本語学習者を対象に－	嵐 洋子
4	隋 林峰		副助詞「は」にかかわる省略表現及び他の付属語関係の省略表現－日常会話における文の考察－	今泉 喜一
5	張 璟穎		中国語母語日本語学習者（中上級）による日本語時間表現の習得－動詞のテンスとアスペクトの分析を中心に－	今泉 喜一
6	白 墨		造語と省略－漢語を中心にした研究－	玉村 禎郎
7	梁 華曦		日本語に見られる意味変化の類型	玉村 禎郎
8	高橋 未央	※	安楽死の自己決定に関する－考察	野山 修
9	飯塚 幸男	※	脳卒中リハビリテーションの変遷	北島 勉
10	村上 茜		発展途上国における子宮頸がん検診方法についての文献レビュー～ Screen and treat approach（検診即日治療アプローチ）を中心に～	北島 勉
11	相内 和広		通訳においての作業記憶力 －訓練と運用－	塚本 尋

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
12	許 金禕		通訳・翻訳資格試験の有効性についての一 考察—日・中・米・豪の試験を中心に—	塚本 慶一
13	程 麗如		翻訳における文化的背景理解の重要性	塚本 尋
14	樋 博信		会議通訳者に必要なスキルとその習得方法 に関する一考察—日本語ネイティブの中国 語学習者を対象に—	塚本 尋
15	頼 若斯		中国のネット翻訳の未来	塚本 慶一
16	李 静		日本語のあいまいさに対する一考察 —言語コミュニケーションの視点から—	塚本 慶一

※リサーチペーパー

2014年春学期 博士後期課程（博士）修了論文

2014. 9. 30

	専 攻	学位授与者	博士論文題目	指導教授
1	開発問題専攻	辛 奕羸	日英中「の、of、的」の対照研究	今泉 喜一
2	開発問題専攻	山内 美穂	「並列」機能を持つ助詞の談話における働き— 「単独」用法に着目して—	金田一秀穂
3	開発問題専攻	董 昭君	『指示詞と時間に関する研究』	金田一秀穂

2014年春学期 博士前期課程（修士）修了論文

2014. 9. 30

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	秦 匡宏		接続助詞「ものの」の使われ方について —パブリックコメントの分析を通して—	荒川みどり
2	陳 莉莉		文語訳聖書にみる中国語聖書訳の影響～「ヨ ハネの福音書」冒頭の「道（ことば）」につ いて～	塚本 慶一
3	楊 楽穎		文化の翻訳可能性についての一考察 —中 国語慣用句の日本語訳を中心に—	塚本 慶一

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	関口 美緒
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲国第 29 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条
学位論文の題目	日本語心理動詞の研究 — 生理的・心理的現象から言語表現までを考える —
審査委員 主査	杏林大学外国語学部教授 文学修士 金田一 秀 穂
副査	杏林大学外国語学部教授 学術博士 今 泉 喜 一
副査	創価大学文学部教授 言語学修士 山 岡 政 紀

要 旨

[論文の概要]

日本語の「心理動詞」研究に対する新しい取り組みとして、「心理動詞」を、生理学・心理学等の知見に基づいて、「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」「思考動詞」の4つに下位分類し、それぞれの特徴を捉え、それぞれがどのように言語表現されるかを論じている。また、先行研究ではほとんど認識されていなかった心理動詞のアスペクトが、「局面指示体系」理論によって把握が可能になることを明らかにしつつ、心理動詞下位4種類のそれぞれの動詞についてアスペクトを詳細に論じている。心理動詞研究の新たな地平を開き、今後の「心理動詞」研究の進むべき方向を示唆する結果となっている。

[論文の構成]

目次

abstract（英文要旨）

はじめに

序章

- 1 日本語心理動詞のとらえ方
- 2 先行研究における心理動詞の概念

- 3 心理動詞の分類
- 第1章 日本語感覚動詞の特徴
 - 0 はじめに
 - 1 感覚動詞の定義
 - 2 感覚動詞における情報源と受容
 - 3 2種の認知法による感覚認知と言語表現
 - 4 感覚動詞のアスペクトの二面性（絶対時間と相対時間／記憶と順応）
 - 5 感覚動詞の擬態語
 - 6 科学的定義と言語表現の相違
 - 7 まとめ
- 第2章 日本語知覚動詞の特徴
 - 0 はじめに
 - 1 先行研究における「知覚動詞」
 - 2 知覚動詞の定義
 - 3 知覚動詞の分類
 - 4 知覚動詞のその他の特徴
 - 5 まとめ
- 第3章 日本語感情動詞の特徴
 - 0 はじめに
 - 1 先行研究における「感情動詞」
 - 2 科学的視点からの「感情」のメカニズム
 - 3 日本人の「感情」
 - 4 「感情動詞」の分類
 - 5 「感情動詞」の類義語
 - 6 対象変化による感情動詞の語選択
 - 7 漢語起源の語の比較
 - 8 問題点
 - 9 まとめ
- 第4章 日本語思考動詞の特徴
 - 0 はじめに
 - 1 思考とは何か
 - 2 言語における「思考」の定義
 - 3 日本語思考動詞
 - 4 擬態語起源の思考動詞
 - 5 派生的・慣用的表現の思考動詞の特徴
 - 6 思考動詞の類義語

- 7 まとめ
- 第5章 日本語心理動詞のアスペクト1－局面指示体系による分析－
 - 0 はじめに
 - 1 局面指示体系モデル
 - 2 感覚動詞（受動的情報感知動詞）のアスペクト
 - 3 知覚動詞のアスペクト
 - 4 思考動詞のアスペクト
 - 5 感情動詞のアスペクト
 - 6 「テアル」と「テシマウ」の解釈
 - 7 まとめ
- 第6章 日本語心理動詞のアスペクト2－局面動詞との共起状況から－
 - 0 はじめに
 - 1 心理動詞と時間的な観念についての先行研究での解釈
 - 2 複合動詞の解釈
 - 3 心理動詞とアスペクト性の複合動詞の結合に関する先行研究
 - 4 心理動詞と完了・完遂の複合動詞の共起関係の再考
 - 5 心理動詞と完了・完遂の複合動詞
 - 6 考察すべき点
 - 7 まとめ
- 第7章 生理的限界点「閾値」と局面変化完了認知基「タ」の関係
 - 0 はじめに
 - 1 生理的境界点・閾値と局面変化完了認知基「タ」の関係仮説
 - 2 局面変化完了認知基と知覚動詞
 - 3 「感覚」と「知覚」の「閾値」到達
 - 4 「知覚動詞」における「閾値」到達認知分類
 - 5 閾値に関する知覚動詞のアスペクト
 - 6 「テクル」の視点からの閾値
 - 7 まとめ

おわりに

参考文献

付録 心理動詞分類一覧表

心理動詞のアスペクト一覧表

[論文各章の内容]

はじめに

心理動詞の研究は内外ともに1990年代に始まった。日本では、人の内面を表す動詞の研究そのものは1970年代からなされていたが、それが心理動詞として研究されることになり、徐々に体系化がなされてきた。一方、脳科学等の分野でも言語的な分析が行われてきており、その報告も数多い。言語学以上に多くの言語分析や研究に触れている場合もある。しかし、言語学と他科学との間でお互いに情報が共有されてきたとは認めがたい。

言語学は主として言語学的知見と経験により、例文分析などを通して結論を導いてきたが、科学的な信頼性の高い結論にまで到達できたとは言い難い。心理動詞に関しては用語も他科学との間にずれが見られ、下位分類も正確に行えているとは言い切れなかった。

心理動詞の研究にはまず心理のメカニズムを知る必要があり、その知見に基づいて理論を構築する必要があると考えられるが、本論文はこの見解のもと、心理学等の研究成果を取り入れて、心理表現をよりの確に把握することをめざしている。

序章

日本語心理動詞を考察するに際し、本研究の独自性を、筆者の作成した「発話者における情報処理過程」の図に基づいて説明し、明確にする。先行研究を概観し、それらの理論も参考にしつつ、新たな心理動詞の分類を科学的根拠に基づいて行うことを述べている。

第1章 日本語感覚動詞の特徴

「五感」とは「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚（皮膚感覚）」である。本章では、言語的表出方法に個人差の大きい「情動・感情動詞」や「思考・認知動詞」を扱うまえに、より直接的な身体反応である五感に関する「感覚動詞群」の分析を試みる。ここで、感覚動詞を「五感に直接関わる第一次的な反応に対する言語的表現」を行うものと定義している。（なお、五感に運動感覚、平衡感覚、内臓感覚を加えて、感覚を8種類に分類する立場もあり、本論文でも、五感以外の感覚にも言及している。）

先行研究では「五感」は言語学的にしか分析されていなかったのであるが、本研究では生理学的に定義を行った結果、五感それぞれの特徴を次のように捉えることになった。

- ・五感の情報源までの距離と情報感知に関する動詞分布に特徴があること。
- ・視覚と聴覚には「受動」の機能を持つ感覚動詞があるが、味覚・触覚にはこの動詞がないこと。
- ・嗅覚には情報感知動詞として「嗅がゆ」が存在したが、現代語には伝わっていない。

いこと。

- ・現代語では嗅覚・味覚・触覚は情報感知（受動的）動詞を持たず、「名詞＋（ガ格）＋する」で表現されること。

また、「感覚動詞」のアスペクトについては、基本的には情報受容継続中の「進行局面」に重点があるが、五感それぞれに違った特徴があることも明らかにした。

- ・視覚には「情報を受容器官で受容している絶対時間」と「認知による時間」がある。
- ・聴覚と嗅覚には、「順応」による認知があり、アスペクト認識に影響を与える。
- ・触覚・味覚では刺激源が直接身体に接触するため、接触時間の長短により「継続的または瞬間的な表現」になる。

さらに、刺激源の「質」、「種類」、「程度」により言語表現（擬態語）は多種存在するが、時間によって「質」が変化する可能性があるため、使用される擬態語も変化する場合があることが判明した。

先行研究は主として言語という観点から見てきたために五感それぞれの詳細な特徴と相違まで把握することはできなかった。本研究は五感の特徴を捉えることができたので、今後、これを踏まえて、感覚動詞のアスペクトに関連した後項動詞との結合関係や人称との関係などについてより詳しい研究を進めることが可能となった。

第2章 日本語知覚動詞の特徴

「知覚」は、感覚から感情・思考へと進む認知過程の中の間プロセスに位置する。それで「感覚動詞」の次は「知覚動詞」を扱う。

先行研究には、例外はあるものの、「感覚動詞」と「知覚動詞」とを分けられないものもあつたり、分けても指し示す内容が逆になっていたりするものがある。「感覚」と「知覚」についての見解が生理学や心理学の見解と少々異なっていたり、認識自体が曖昧であつたりすることが指摘できる。

本論文は、まず、生理学・心理学等の分野での「知覚」の概念を総合的に考察し、「知覚」の定義を見出し、それに基づいて「知覚」から生じる言語表出である「知覚動詞」の定義づけを行っている。

知覚は感覚より高次にある。感覚は単純に刺激が信号として身体反応を起こしているだけであるが、その信号が知覚されて初めて個々の判断となり、感情へと進むとみられている。このような理解のもと、知覚の言語化はその知覚で起こった表象・心象の投影が音声化や文字化等の形で表出したものである、と定義するのが良いと考えている。

その結果、知覚の言語化した「知覚動詞」を3つの視点から考察・分類する。

分類Ⅰでは「知覚」を生理学的原因と症状の認知という視点から考察している。人

間の知覚においては身体変化の原因と症状発生の身体部位が必ずしも一致しないことが多いため、「知覚」を言語表現する場合も、原因の部位によってではなく、症状発生の身体部位によって表現することが多くなる。つまり、「知覚動詞」は症状発生の身体部位での「知覚」を表現することになる。

分類Ⅱでは「感覚」が主に「身体」に作用するのに対し、「知覚」は「身体」と「精神」双方に作用する特質を持つという観点に立って、「知覚動詞」を4種類に分類している。

- (1) 身体作用と精神作用が個々に独立して言語表現される語（例：「疲労」系）
- (2) 身体作用のプロセスを投影して精神的言語表現が行われる語（例：「爽快」系）
- (3) 身体作用が精神に投影されて言語表現される語（例：「麻痺」系）
- (4) 精神作用が身体作用に影響して言語表現される語（例：「のぼせ」「悪寒」系）

分類Ⅲでは「知覚」に関連した言語表出がなされるプロセスを考慮しつつ「知覚動詞」をアスペクトのあり方によって4種類に分類している。

- (1) 瞬間反応型……結果状態に重点。（「くらむ」類）
- (2) 瞬間認知型……結果状態に重点。動詞事象の開始以前に前兆がある。
（「すっきりする」類）
- (3) 短期継続型……進行過程が言語化される場合もあるが、閾値に関わる局面変化認知により結果状態に重点がある。（「お腹がすく」類）
- (4) 一般的継続型…進行局面に重点。結果状態はほとんどない。（「頭痛がする」類）

このように様々なアスペクトがあるのは、「感覚動詞」では刺激・信号の受容に受動的なかたちで関わるため「進行局面」にのみ重点があるのに対し、「知覚動詞」の場合には受容した信号を身体が認知し反応するまでの間に、複数の要因があるためである。

以上の分析に加えて、意味の拡張にも言及している。

さらに、擬態語にも言及し、「感覚動詞」では擬態語が「触覚」表現に集中するのに対し、「知覚動詞」ではあらゆる身体部位での表現に擬態語が用いられることを明らかにしている。

第3章 日本語感情動詞の特徴

「感情動詞」の特徴を、「感情」の発生から「感情」の言語表出までのメカニズムをたどる形で考察している。

刺激信号が感覚受容器を通して受容され、知覚として認知された後に分岐する一つの経過点で「感情」が発生する。「感情」はさらに「思考」という高次機能へ伝達される場合もあり、また、身体機能（運動野）に様々な影響を及ぼす根源になる場合もある。このようなメカニズムを考慮にいれ、「感情動詞」の特徴を分析・分類する。

前章までの「感覚動詞」と「知覚動詞」は「感覚」と「知覚」の言語表現であり、

それらはある程度「身体反応」に直接影響されるものであった。その意味では、実際に身体で行われている生理作用にしたがって語の性質、分類、アスペクトなどを分析することができた。しかし、「感情動詞」における「感情」については、身体反応の分析と言語表現との対照のみで分析が行えるわけではなく、心理学、哲学、文化的背景といった分野も考慮しなければ、分析が不備になる。

論者は、運動・思考系と感情・情動系の脳における処理の部位が大きく2つに分かれることから、思考と感情は分けて考察するべきであると考えられるとしている。

続いて心理学の視点から情動・感情について検討し、原始的な感覚に近い感情から上位感情への発展過程をみることの重要性を考察したうえで、日本語感情動詞としての語の例を明らかにしている。

心理学の視点から、さらに、「本能・欲求・高次感情」を階層的に考察する必要があるとし、マズロー、エクマン、ジェームス、フロイト、マツモト、ダマシオ等の学説を検討している。その結果、感情が下位分類されることが明らかになった。さらに、情動については「基本情動」の定義がなされること、また、感情については、「欲求段階説・本能説・自覚レベル説」などにより、本能（動物的・生得的）より上位に至る感情段階（社会性など）の分類ができることが明らかになった。

以上から、「感情」という概念が明らかになり、「感情動詞」についての考察を進める準備ができた。

次に、日本人の情緒・感情の特徴に言及している。エクマンを援用しつつ、日本人には一般的な心理理論がそのまま適用できない感情表現の特殊性があるとし、日本語を扱うには、さらに日本人の感情を分析し、特徴を把握する必要があるとしている。そこで、日本人の情緒を哲学者の九鬼の考察や、喜怒哀楽という日本的な情緒の分析から、日本人の傾向を探り、その結果、日本語感情動詞を次のように捉えることになった。「日本語感情動詞」というのは「基本情動」に、3つの軸（快・不快、緊張・弛緩、興奮・沈静）と日本の社会的・歴史的背景を加味して使用されるようになった（表情・態度に直接つながらないこともある）情動・情緒・感情を表現する動詞である。

さらに続けて「感情動詞」の分類を行っている。日本語感情動詞を心理学での感情段階に引き当てることから始め、日本語における「快・不快」に関する語の対照や分布を詳細に検討している。さらに寺村による感情の分類からヒントを得て、アスペクトによる分類を行っている。また、動詞の種類の変遷（動作動詞、状態動詞、心理動詞が歴史的にどちらの方向に派生・意味拡張してきたか）により、英語・ドイツ語との比較を踏まえて、日本語の特徴を明らかにし、日本語の心理動詞には西欧語と異なった特徴があるとし、この点からも日本語心理動詞を分析する意義は大きい、としている。

「感情動詞」の類義語についても論じている。心理動詞の派生・意味拡張から類義語の観念がつかめるとし、分類の基準として3通りの基準を立てている。

1つ目は、感情の段階を基準とするもの（マズロー／ダマシオ）で、生得的な情動から人間社会を背景とする高次の感情までを4つに分類している。これらの言語表現は、自己の世界から始まり、他者との関係の段階にある高次の感情になるにしたがって、相手・対象と自分との関係が重要になり、登場人物の立場や状況によって語や文構造の揺れが生じやすくなる、とする。

2つ目として、「正・快／状態・中立／負・不快」という最も初期的・原始的な感情（感覚感情）による3分類がある、とする。

3つ目は2番目の分類からヒントを得、さらに寺村の感情表現の分類にある状態的な感情と動きのある感情という発想を応用し、アスペクトからの分類を行っている。日本語の先行研究では言語的特徴の側面のみから感情動詞を分類してきたが、本研究では、このように心理学的な根拠に基づき感情動詞の新たな分類を試みている。

感情動詞の擬態語の特徴や、慣用句表現についても考察するほか、感情動詞の歴史的变化や漢語起源の語についても触れている。

第4章 日本語思考動詞の特徴

まず思考の概念と分類を把握し、それらを基盤として思考と言語の関係を考察する。「思考」とは何かという枠組みがあやふやなまま、「言語表出」について語ることは、科学的根拠を持たないまま、経験論で片付けることになりかねない。そのような根拠を持たずば、どの分野の研究者が処理しても、研究上のぶれが少なくなる。

思考（思考の3機能）とは、概念・判断・推理の脳内活動を指す。その活動は、心的過程もしくは心的操作という作用により、目的を達成する。言語における思考には、2通りの解釈がある。まず一般判断のように、判断や推理などの心的過程を経由し、心的操作を伴い、問題解決に導く一連の思考過程、つまり明確な意図性・意志性による思考活動を思考と考える解釈である。もう1つは、全く意志性や意図性がなく、自然発生的に考えなり、思いなりが湧き上がってくるものであり、この場合になされる言語表現を思考と考える解釈である。いずれにしても、言語表出は一連の心理活動（思考活動）の最終段階であり、言語表出以前の心理（思考）の表象をことばに投影したものであると考えられる。したがって言語の研究ではあっても「思考」についての明確な考察が必要である。

このようにして、思考について、一般的科学理論や種類、構成要素等の側面から詳細に検討を続けた後、思考と言語のつながりについても詳しく考察している。そして、思考は言語と密接な関係にありながら、その反面言語は思考を攪乱することもあると述べている。

以上のように、本章では思考と言語との関係について述べた上で、思考と思考動詞の定義を行っている。

さらに、思考動詞は、思考活動を意図性・意志性でコントロールできる場合と、自

然発生的な思考活動を表現する場合との2面性を持つともしている。コントロール性は動詞の aspekto に関する。コントロール性のあるもの（計画や問題解決）は、「中断」することができるという特徴があり、この点において「感覚」「知覚」「感情」とは対照的である。

次に日本語思考動詞の分類に言及し、先行研究による分類をいくつか示したのち、aspekto による分類を提示している。「考える」を中心に aspekto の特徴を考察したのち、思考動詞を「継続動詞」的性質を持つもの、「瞬間動詞」的性質を持つもの、両方の性質を持つものに分類している。また、意志性・意図性のあるものとないもの、その両方の性質を持つものにも分類している。

ほかに、思考動詞は擬態語を思考の様態の表現としては使用するが、擬態語そのものが思考動詞となることはないことを述べ、また、派生的・慣用的表現の思考動詞の特徴について論じ、さらに、思考動詞の類義語に言及している。

第5章 日本語心理動詞の aspekto 1—局面指示体系による分析—

先行研究では、心理動詞の aspekto の存在を確認することはできない、あるいは心理動詞は aspekto から解放されている、という認識であったとみられる。しかし、心理作用が働き、心理が表出されるという事実は、生理的にも心理的にも“実際に”時間経過とともに生起している。現実の心理作用には時間経過があるのに、言語としての心理動詞に時間経過が把握できないとして処理するのは短絡的であると考え。ここで、今泉（2000）の「局面指示体系」理論による分析方法を採用し、考察を始めている。今泉が動作動詞と状態動詞の全ての aspekto パターンを分析していることから、心理動詞においてもこの理論で aspekto 性を証明できるという仮説を立て、今泉モデルに心理動詞の下位分類動詞（感覚動詞、知覚動詞、感情動詞、思考動詞）を適用して考察している。

「感覚動詞」では、経験者が自らの意志をもって情報受信をコントロールすることはできず、刺激の消滅と共にその状態が終了する。五感の感覚器官が刺激を受信している間のみ、進行局面として認知が強調されるだけであり、感覚動詞には結果状態継続中の局面がない。

これに対し、「知覚動詞」は進行局面にあたる認知は瞬時に行われるため表現されず、その後の結果状態継続中が表現される。

「思考動詞」の場合には aspekto の多様性がある。意志性・意図性がある場合は、より動作動詞的な aspekto（「テイル」が3つの局面を持つ）を示し、ない場合は進行局面の完了が不明瞭な aspekto を示す。

瞬間動詞の観点からは2種類のものがある。知識・情報獲得を目的とした瞬間動詞「知る、分かる、理解する」などは、知識・情報を認知する以前の（0の）段階があり、実際の aspekto はそこから始まる。（④の）結果状態継続中に重点がある。一方、「

ひらめく」は、集積された無作為の記憶が照合される結果、認知が偶然性をもってなされた事象であるため、(0の) 開始以前の段階は含まない。また実際には(④の) 結果状態は存在するものの、関心のある出来事としてはその瞬間のみなので通常(④) は言語表現がなされない。このように両者間には(0の) 開始以前と(④の) 結果状態継続中の解釈に相違がある。

「感情動詞」のアスペクトにも多様性がある。目的語の違いにより2種類の継続動詞が区別され、「愛する、憎む、恨む、恋する」等は、終了には「自然消滅タイプ」と「興味喪失タイプ」との区別があるが、共通する点としては、結果状態継続中と(⑤の) 結果状態継続の完了(消滅)が表現されず、進行局面に重点がおかれるという特徴がある。

さらに瞬間動詞という観点から「驚く、キレル」と「かっとする、ドキッとする」等を考察し、また認知・評価的反応という観点から「失望する、落胆する、がっかりする、しらける」等を考察している。

「テアル」が、心理動詞が意志性を持つ場合に付くことに触れ、また「テシマウ」が心理動詞の開始局面に付く場合のあることにも触れている。

第6章 日本語心理動詞のアスペクト2—局面動詞との共起状況から—

第5章では理論を通じて考察したのに対して、第6章では実践を通じて心理動詞のアスペクトを考察している。局面動詞との共起状況という視点からの考察になる。

先行研究では、データとして、心理動詞に分類されている動詞と「始める・終わる」等のアスペクト(時間)を示す後項動詞が共起した用例を提示することで、心理動詞の時間的観念、特に終結点の存在を証明できると考えている。しかし、それらの用例の心理動詞が本当に心理動詞として機能しているのかということについて疑念を禁じ得ない。そこで、本論文は改めて心理動詞のアスペクトのあり方と完了・完遂の後項動詞との共起について分析しつつ、どのような要素がそれらの結合を可能にしているのかを考察している。先行研究ではインターネット(Google/GOO)によって例文を検索し、考察しているが、本研究ではさらに新聞記事と小説という資料を加えて分析を行う。

多くの事例の検討から、心理動詞は、複数の理由から完了・完遂というアスペクトの概念を持ちにくいという結論に至った。

結論1：終了・完了・完遂の局面動詞が心理動詞と共起する場合、2つの場合が考えられる。一つは「意志性・意図性」のコントロールができる場合であり(例「考える」)、もう一つは、動作動詞と心理動詞の2面性を持つ語が動作に重点を置いて使用された場合である(例「祈る」)。

結論2：一見「共起」しているように思われる関係でも、別の意味や状況で「結合」しているにすぎない場合がある。後項動詞となる局面動詞に複数の意味が発生し、必

ずしも「終了や完了」の意味でないこともある。また前項動詞となる心理動詞も同様に、動作として解釈される場合がありうる。よって前項と後項の両方から観察していかなければならないと考える。

結論3：複合動詞を扱う場合、慣用的表現も考慮しなければならない。類義語といえる語でも、慣用性等の相違から頻繁に使用される結合例と使用されにくい例とがある。

結論4：動詞の進行や終了も多様である。感情動詞、知覚動詞のようにON/OFFによって進行局面と完了の局面が表現されるものでも、程度の質に違いのあるものがある。感情動詞の程度の質は、心理の“深さ／浅さ”で表現され、脳の中にその基準がある。知覚動詞の程度の質は“強度や量”にある。慣用的な表現にも終結時間のとらえ方のヒントがある。

結論5：主観性と客観性との差異から考察することもできる。

このような現実の時間の流れと心理的時間の流れの相違をどのように把握するかは心理動詞研究の今後の課題となる。

先行研究では心理動詞を「心的情態動詞」、「感情動詞」、「心理動詞」などとして扱い、完了・完遂の後項動詞との共起データを対象として調査してきた。しかし、そこで「心理動詞」として扱われている動詞は本来の「心理動詞」的用法にないものもあることが判明した。

第7章 生理的限界点「閾値」と局面変化完了認知基「タ」の関係

心理は心の内側にあり、他者は言語表出によってその心理を知る。このため心理現象と言語表現の関係を知ることが重要となる。本研究では生理学・心理学等で打ち立てられてきた理論が言語の諸現象の解明に貢献すると考えているが、本章では生理的限界点「閾値」と日本語表現の関係を考察する。

心理動詞の中の「知覚動詞」のアスペクト表現の一つである「タ」（局面変化完了認知基）が、生理学の現象である「閾値」の認知にしたがって言語表出されるという仮説を設定した。「閾値」には段階があり、局面変化完了基にもいくつかの側面がある。そこで、どのような場合に「感覚」となり「知覚」となって認知されるのかを詳しく分析し、日本語表現との関係を考察した。

その結果、日本語では「閾値」を認知した直後に「タ」で言語表現されるという裏づけを得て、上記の仮説の妥当性を確認した。知覚動詞の場合、この「タ」は「局面変化完了認知直後のタ」に該当する。これにより生理的限界点「閾値」と「タ」という表現が重なることが明確になった。

おわりに

心理動詞の研究には他分野、特に心理学的な分野の理解が必要であるか、という問

いに対して、筆者は一貫して、心理学的な分析を交えた言語学的な分析の必要性を主張してきた。この主張の妥当性について論述している。

次に、本論文の内容をまとめている。さらに、研究の今後の発展のために留意すべきことをいくつか述べ、最後に、実際の言語表現はあまりに複雑かつ偶然性にも左右されることから分析が困難であると思われるが、これらの課題も今後解明していきたい、との決意を表明している。

付録

「心理動詞分類一覧表」「心理動詞のアスペクト一覧表」として合計13の表を作成・掲載している。本論文の内容理解の助けになる。

[論文の特徴]

この論文には次のような特徴がある。

- ① 「心理動詞」の研究は1990年代半ばより始まり、いまだ20年に満たない。先行研究では「心理動詞」と謳いながら、実は動作動詞との区別ができていないものもある。また、そもそも「心理動詞」を特立する必要性を認めない研究者もある。このような研究状況下でありながら、本論文は生理学、心理学等の研究成果を援用して考察を進め、「心理動詞」を動作動詞と区別して特立する必要性を論じている。
- ② 本論文では①の考え方にに基づき、「心理動詞」を「感覚動詞」「知覚動詞」「思考動詞」「感情動詞」に分類している。先行研究では「感覚動詞」と「知覚動詞」の指す内容が逆であったり、それぞれの動詞の定義に曖昧なところもあった。
- ③ 先行研究では「五感」を言語学的にしか見ていなかったが、本論文は「五感」を中心に分析し、「感覚動詞」について各語の特徴と相違を捉えながら記述している。
- ④ 「知覚動詞」は知覚の原因部位ではなく、それを発生する身体部位での表現となることを明らかにした。
- ⑤ 「知覚動詞」を、身体と精神の両方との関わりから、4種類に下位分類する必要性のあることを主張した。
- ⑥ 「知覚動詞」を、刺激・信号を受け入れる際のアスペクトのあり方から4種類に下位分類する必要性のあることを主張した。
- ⑦ 擬態語は、「感覚動詞」では「触覚」表現に集中し、「知覚動詞」ではあらゆる身体部位で表現されることを明らかにした。
- ⑧ 英語・ドイツ語の心理動詞との対比において日本語心理動詞の特徴を明らかにし、これを研究することの重要性を主張した。
- ⑨ 「感情動詞」の類義語の分類のための基準として3通りのものがあることを明らかにした。

- ⑩ 思考と「思考動詞」を定義し、両者に意志性のある場合とない場合のあることを明らかにしたが、これは「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」と異なる特徴を有する面があることを示したことになる。
- ⑪ 「思考動詞」をアスペクトの側面から、また意志性の側面から分類した。
- ⑫ 擬態語は思考の様態を表現することはできるが、「思考動詞」そのものになることはできないことを明らかにした。
- ⑬ 最も重要な本論文の特徴は「局面指示体系」理論を「心理動詞」に適用し、それぞれの動詞のアスペクト表現の特徴を明らかにしたことである。「感覚動詞」には結果状態継続中の局面がない。「知覚動詞」には進行局面がない。「思考動詞」は継続的・意志的であれば動作動詞と同様のアスペクト表現をとり、継続的・非意志的であれば完了が不明確になる。瞬間的動詞の場合は、前段階があって、結果状態継続中に重点があるものと、前段階がなく、結果状態継続中の表現されないものの2種類がある。「感情動詞」は進行局面に重点がある。完了には自然消滅と興味喪失の場があり、結果状態継続中は表現されない。また、進行局面完了の把握しやすいものもある。
- これは同時に「局面指示体系」理論が心理動詞にも適用できることを明らかにしたことを意味する。
- ⑭ 「心理動詞」と局面動詞との共起について調査し、心理動詞は完了・完遂のアスペクトを持ちにくいことを明らかにし、その理由を述べた。これは同時に先行研究での調査の不備を指摘することにもつながっている。
- ⑮ 日本語では「知覚動詞」を局面変化完了認知基「タ」とともに用いることがあるが、これは生理学の現象である「閾値」の認知されたことの表現であることを明らかにした。

[今後の課題]

本研究では、日本語の心理動詞を下位分類する根拠を確かなものとするために、生理学・心理学等の研究成果に学んでいる。言語表出される人間の心理をそのような分野の研究成果に基づいて考察することは、特に心理動詞の研究には欠くことのできない重要なことと考えられる。しかし、異なる分野の研究成果であることでもあり、その扱いには十分注意が必要である。本論文に論述された内容もその妥当性については今後さらに検討が加えられなければならない。そのような他分野での研究の進展にも注意深い目配りを欠かすことができない。

現段階での研究が博士論文としてまとめられたが、これは心理動詞研究の終結点を示すものではなく、新しい出発点を示すものである。この出発点に立つに際し、このような課題について改めて認識する必要がある。

[研究史における意義]

扱いが曖昧であった日本語の「心理動詞」を、生理学・心理学等の知見に基づいて考察し、「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」「思考動詞」に分類し、それぞれの特徴を細かく捉え、それぞれがどのように言語表出されるかを明らかにしたこと、及び、先行研究ではほとんど認識されていなかった心理動詞のアスペクトが「局面指示体系」理論で把握できることを示したこと、この2つは、心理動詞の研究に新たな地平を開いたことになり、今後の研究の進むべき方向を示唆したことになる。また、「局面指示体系」理論が心理動詞にも適用できることを示したことに意義がある。

[評価]

以上により、本論文は内容的にも、研究史的にも大きな意義の認められる論文であると評価できる。このため、審査者一同は、論者である関口美緒氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

氏名	SELO YUDIBRATA
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲国第 30 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条
学位論文の題目	観光開発が住民の生活環境と健康に及ぼす影響 —インドネシア Kampung Dukuh 現地調査による考察—
審査委員 主査	杏林大学総合政策学部教授 保健学博士 高坂 宏 一
副査	杏林大学総合政策学部教授 保健学博士 野山 修
副査	東京医療保健大学東が丘看護学部教授 保健学博士 今井 秀 樹

要 旨

本研究は、観光客（巡礼を主目的としている）の増加による住民の生活と健康への影響を、インドネシア西ジャワ州の農村地域にあるイスラム教の聖地を持つ村において検討したものである。

本研究の対象は Kampung Dukuh とその住民である。Kampung は生活共同体の基本単位であり、村と捉えても大きな間違いはないが、行政単位の村とは異なり、あくまでも生活共同体である。

本論文の筆者はパジャジャラン大学在学時からこの集落の特色、すなわち住民が自主的に伝統文化の維持を重要視して生活していることに興味を持ち、この集落をフィールドとして調査を行ってきた。2002 年から 2004 年にかけて断続的に行った文化人類学調査で、当集落の住民が伝統を維持しようとする意識は変わらない一方で、社会変容が起こっていること、そしてそのもっとも重要な要因は観光であったことが本研究を行う契機となっている。なお、2008 年にはインドネシアにおける観光産業の重要性について分析し、修士論文「インドネシアにおける観光発展戦略の考察」を成している。

本研究は、以上の経緯と予備調査を踏まえ、現地調査によって食べ物の種類や量、睡眠時間、労働の内容や時間の変化、飲み水の汚染といった生活環境の変化のデータを収集し、Kampung Dukuh における観光開発が住民の生活環境と健康状態に及ぼ

す影響について分析、検討したものである。

現地調査は2012年10月～11月に行われている。集落の住民558人のうち、17歳以上の成人225人を対象とし、調査内容を説明して同意が得られた人のうち、調査期間に、インタビューすることができた96人のデータを用いている。なお、本研究調査の実施については杏林大学大学院国際協力研究科研究倫理審査委員会の承認を得ている。

調査項目と分析方法は以下の通りである（1～5が調査項目、6が分析方法）。

1. 生活活動調査：観光客が滞在する日としない日のそれぞれ任意の1日の行動について思い出し法により、起床から就寝までを1時間単位で記録してもらい、生活時間のデータを得ている。

2. 食事調査

観光客が滞在する日としない日のそれぞれ任意の1日に摂取した食材の種類と量を思い出し法により記録してもらい、インドネシアの食品成分表に従って、摂取エネルギー量および、糖質、脂質、蛋白質の摂取量を計算している。

3. 体格測定

観光客の訪問に伴う生活活動の変化が消費エネルギー量に影響し、食事内容の変化が摂取エネルギー量に影響することを念頭に、住民の体格測定を行っている。測定項目は、身長、体重、胸囲、腹囲、皮下脂肪厚（以下、皮脂厚）で、対象者のFFM（Fat Free Mass）を推定し、身長と体重よりBMI（Body Mass Index）を算出している。

4. THI（the Total Health Index）

観光客の健康への影響を全般的に調査するためにTHIを行っている。THIは130問の3択式質問項目からなる調査票で、心身の個別的健康面が12個の尺度の得点で定量的に把握される。さらに、3つの疾病（体のストレス、心のストレス、統合失調症）の判別値および、2つの総合尺度（心身総合不健康、体不健康心普通）についても評価可能である。調査はインドネシア語版THI（the Total Health Index）を用い、対象者の自宅を訪問してインタビューしている。

5. 生活用水の大腸菌検査

飲料水が、尿尿に汚染されている可能性があると考えられる4つの異なる水源からサンプルを取り、バンドン工科大学環境工学部の水質研究室に依頼して大腸菌検査を行っている。

6. データ分析

上記の調査項目データを変動させる要因は複数考えられるため、はじめに多変量解析を行っている。分析は、観光客の影響を示す因子として①観光客が滞在する日としない日、②観光客との接触の有無、③観光客との接触の程度が異なる3つの居住地区、さらに、それ以外の因子および共変量として④性別、⑤年齢、を

想定し、どれが有意に働いているかを重回帰分析またはロジスティック回帰分析で調べている。次に、有意であった因子が、各データの変動にどのように関与しているかを、分散分析および t-検定または U-検定を行って調べている。分析には統計ソフト SPSS Ver. 21.0 を使用している。

分析の結果得られた主な知見と考察は以下の通りである。

1. 重回帰分析またはロジスティック回帰分析の結果、観光客の影響が有意であったのは、以下の項目であったとしている。
 - ① 生活活動調査：睡眠、無活動、礼拝、テレビ視聴、食事、農作業といった活動時間。
 - ② 食事調査：エネルギー摂取量および、糖質と蛋白質の摂取量。
 - ③ THI：多愁訴、神経質、抑うつ、といった精神的な健康尺度。
2. 上記の回帰分析で有意であった因子がデータの変動にどのように関与しているかについて以下の結果を得ている。
 - ① 観光客の滞在により、農作業などのエネルギー消費量が多い活動に関する時間が短くなり、巡礼式の手伝いなどのエネルギー消費量が比較的少ない時間が長くなっている。
 - ② 摂取したエネルギー量や栄養素の量は、平均年齢が低く観光客との接触頻度が中程度の地区が、他の地区より多い。
 - ③ 観光客との接触頻度が異なる 3つの地区間で体格の有意な差は男女ともに認められない。
 - ④ THI の結果、観光客の滞在や接触による健康影響は、身体的側面より、精神的側面について女性に認められている。一方、男性には認められず、観光客との接触がストレスになる可能性について考察している。
 - ⑤ 水質検査の結果、全てのサンプルから大腸菌が検出され、更に詳細な検討が必要であること、今後の観光客の増加に対応できる衛生環境整備が必要であるとしている。

以上が論文の概要である。審査ではデータの分析方法をはじめ論文構成や用語の適切性など多岐にわたる指摘と質疑応答がなされ、審査員の大幅な修正の求めに応じて改訂された。本論文は著者自身の地道な現地調査によって得られたデータにもとづく研究であり、それを可能にしたのは 10 年以上にわたる現地の人々との良好な関係の構築である。また、本論文は観光開発の研究に関して健康影響、環境問題、住民の意識と行動変容という新たな視点から取り組んでおり、地域研究として、また観光研究の分野においてオリジナリティが高く、今後この分野の研究に少なからず貢献すると考えられる。以上、審査員の指摘に応じて修正された本論文は、審査員全員が学位授与に値すると判断した。よって合格とする。

氏名	辛 奕羸		
学位の種類	博士 (学術)		
学位記番号	博甲国第 31 号		
学位授与の日付	平成 26 年 9 月 30 日		
学位授与の要件	学位規程第 5 条		
学位論文の題目	日英中「の、of、的」の対照研究		
審査委員 主査	杏林大学外国語学部教授	文学修士	金田一 秀 穂
副査	前・杏林大学外国語学部教授	学術博士	今 泉 喜 一
副査	大東文化大学外国語学部教授	文学博士	田 中 寛

要 旨

[論文の概要]

日本語の「の」、英語の「of」、中国語の「的」は、名詞とともに使用されて他の名詞を修飾する機能を持つ。この3者は従来、表層にある文のレベルにおいて、主として翻訳上の関心から、2言語間に対応関係が研究されることが多かった。本論文は、この類似した機能をもつ3者をその本質において捉えて対照しようとしている。依拠する主要な理論は日本語構造伝達文法の深層構造理論と認知言語学の参照点理論である。この両理論に共通する特徴は、人間がある判断を表層の文で表現する前の段階で、事態をどのように認識しているのかを理論的に解明しようとするところにある。

本論文では、まず「の/of/的」3者それぞれの歴史的展開における特質を捉えて対照する。次に、認知言語学の参照点理論においてこの3者の特質を捉えて対照し、そののち、日本語構造伝達文法の前言語構造においてこの3者の特質を捉えて対照する。この3種類の方法による対照研究の結果として、「の/of/的」3者に関する新しい仮説としての理論が導き出される。そして最後に、この仮説に従って25種類の名詞の組み合わせ事例の検討を行い、結論を得る。

[論文の構成]

- 目次
- 序論

- 1 表層と深層—深層の重要性
 - 2 問題の所在
 - 3 研究課題
 - 4 本論文の構成
- 第一部 理論研究
- 第1章 基本概念
- 1.1 認知言語学について
 - 1.2 認知心理学と「注意」
 - 1.3 日本語構造伝達文法と「主体・客体」
 - 1.4 語用論と「協調の原則」
 - 1.5 本論文の用語について
 - 1.6 まとめ
- 第2章 名詞の意味的な分類
- 2.1 日本語の名詞
 - 2.2 英語の名詞
 - 2.3 中国語の名詞
 - 2.4 本論文で扱う名詞
- 第3章 「の」、「of」、「的」3者の伝統文法から見た研究
- 3.1 日本語「の」について
 - 3.2 英語の「of」について
 - 3.3 中国語の「的」について
 - 3.4 「の」、「of」、「的」3者の表層意味の対照研究
 - 3.5 まとめ
- 第4章 「の」、「of」、「的」3者の認知文法から見た研究
- 4.1 日本語の「の」（連体修飾語を構成する用法）について
 - 4.2 英語「of」について
 - 4.3 中国語の「的」について
 - 4.4 「の」、「of」、「的」3者の本質的意味の対照研究
 - 4.5 まとめ
- 第5章 日英中「N + の /of/ 的 + N」の前言語構造と対照分析
- 5.1 先行研究と本研究
 - 5.2 「N + の /of/ 的 + N」3者の前言語構造の形成
 - 5.3 「N + の /of/ 的 + N」の前言語構造の対照研究
 - 5.4 まとめ
- 第二部 各論
- 第6章 日英中「N + の /of/ 的 + N」の対照研究

- 6.1 先行研究
- 6.2 フレーズ「N + の /of/ 的 + N」の対照考察
- 6.3 日英中「N + の /of/ 的 + N」の対照研究 (A ~ Y)
- 6.4 A ~ Y のまとめ

結論

謝辞

主要参考文献

[論文各章の内容]

序論

日本語の「の」、英語の「of」、中国語の「的」3者の意味と使い方には似ているところがあるが、異なるところもある。これは文という表層での現象であり、このことについて論じるときは、「の」、「of」、「的」3者そのものが何であるのかについて深層構造レベルで解明しなければならない、とし、文という表層表現において異同が存在することについて、原因を深層の構造のあり方から研究する、という本研究の研究方針を述べている。ただし、本研究の設定する深層構造はチョムスキーの生成文法での深層構造とは異なるものである、としている。

続いて、「の /of/ 的」については日本、欧米、中国で盛んに研究が行われているが、なお研究の余地があるとし、以下の問題点について研究しなければならない、としている。

①辞書には「の /of/ 的」の意味が「所有」、「所属」、「材料」、「場所」などであると明示されているが、これは「の /of/ 的」そのものの意味ではなく、深層における「の /of/ 的」の2名詞をつなぐ機能から発生する表層的現象である。表層での意味が「所有」であるか「材料」であるかは構造のあり方が決定するのである。このことの解明がなされなければならない。

②「の /of/ 的」の従来行われていた対照研究は表層の言語表現での対照研究であり、表現における「の /of/ 的」の使用に異同があることが盛んに論じられた。しかし、なぜそのような異同があるのかについては適切に説明することができなかった。本研究では深層構造そのものの対照研究により、その説明が可能になると考える。多義発生の説明もできるようになる。また表層構造以前に前言語の段階の存在を設定することによりニュアンスの存在も説明可能となる。

この①②の研究を進めるに当たって8つの課題を設定することを述べ、さらに本論文の構成を説明している。

第一部 理論研究

第1章 基本概念

本論文で扱う用語を説明している。認知言語学からは「前景と背景」、「メタファー」、「メトニミー」、「イメージスキーマ」、「プロトタイプ理論」、「参照点理論」について必要な説明を行い、認知心理学からは「注意」について、日本語構造伝達文法からは「主体・客体」について、語用論からは「協調の原則」について説明している。

また本論文で独自に設定する用語として、「重点化」、(文として発話された)「言語」があり、ほかに、「日本語構造伝達文法」の考え方から設定した「前言語」、「前言語構造」があるとし、「前言語構造」は日本語構造伝達文法の構造モデルにより示される、としている。

加えて、日本語研究から生まれた「日本語構造伝達文法」の理論を他言語に適用するために、「主体」、「客体」、「属性」の用語の内容を若干変更したことを述べ、さらに「可視的動詞」と「不可視的動詞」について論じている。

本章は第2章以降における論述の理解を助けるためのものと位置づけられる。

第2章 名詞の意味的な分類

本研究では名詞が重要な位置にあることから、名詞をどのように扱うのが研究を進めるうえで現実的であるかについて考察している。日本語、英語、中国語での名詞の扱いには違いがあるので、対照できるようにするためには、日英中の名詞の分類を限定的なものにする必要があると判断し、本論文では、名詞としては人名詞、モノ名詞、場所名詞、時間名詞、動作名詞の5種類の名詞のみを扱うことにした、としている。

3言語の膨大な名詞をこのような形で整理して研究対象にすることができたことは一つの見識であると評価できる。

第3章 「の」、「of」、「的」3者の伝統文法から見た研究

現代語の「の/of/的」3者は似た文法機能と意味を持つが、その本質を捉えるためには、元来その3者がどのようなものであったのか、また、どのような歴史的変化を通じて似た文法機能を持つようになったのかについて把握する必要がある。この認識のもと、(伝統文法の中で)これまで行われてきた先行研究の成果に依拠する形で「の」、「of」、「的」の通時的な解明を行っている。

日本語の「の」については、まず歴史的に発生した「の」の各種の意味・用法について概観して、その全体像を把握している。続いて、本研究に大きく関わる「格」の定義について考察し、「格」は伝統的な国語学での定義ではなく、現代の日本語学研究者による定義のほうが適切であるとしている。ここから、「の」は格助詞には当たらず、格の関わる論理関係にある2つの名詞をつなぐ(名詞で名詞を修飾する)助詞であるとしている。

英語の「of」についても、まず通時面から考察している。もともと外形として強形「æf」と弱形「of」を持つ前置詞的副詞「af」が存在したが、これが「of」に統一され、のちに強形として生じた「off」が「of」の副詞としての用法を担うようになって以降、「of」は前置詞としての意味と用法を保ち、大きな変化がなく、主として全体と部分の関連を表す語として現代英語になっている、としている。

次に、所有格を表す「's」と「of」の異同を検討し、「's」の前に置かれる名詞が有情名詞に限定されることから、「の」、「的」に似て自由度の高い前置詞である「of」を本論文での研究対象にすることを述べている。

中国語の「的」については、中国語文法において重要な位置を占める語であり、先行研究も多い、としている。本研究ではそれらの先行研究に依拠しつつ、通時面から考察している。

まず、後に「的」に連体機能等をゆずることになる「底」について論じる。「底」の歴史的展開を述べ、代名詞から指示代名詞へ、さらに疑問代名詞、連体助詞へと発展したとしている。次に「地」にも触れ、名詞用法のほかに、助詞として描写作用と進行中のアスペクト表示機能があったとしている。

こののち、「的」について論じている。古代中国語においては「的」は形容詞、名詞、副詞、助詞として存在した。形容詞としての「白い」の意味での「的」は、名詞としての「弓矢のまと」になり、さらに名詞「遠く」「標準・目標」「音階の標識」「婦人の赤い装飾」「そびえ立つ山頂」へと意味を拡張した。また、名詞「弓矢のまと」である「的」は、副詞「確実に・的確に」へ、さらに「必ず・きっと」、「いったい」へと拡張した。これらの拡張はメタファーないしメトニミーによるものであるとしている。

宋代において、「底」は連体助詞としての機能とともに内容語としての多くの意味を持つようになっていたが、音声的に近似しており、内容語としての意味を失いつつあった副詞の「的」に連体助詞としての機能をゆずり、「底」自身は名詞に特化することになった。このとき、「底」の持っていた「地」の要素も「的」に引き継がれた、としている。

「の /of/ 的」3者の意味の対照について、以上の通時的把握から得られた情報に基づき、完全対応をする場合、部分対応をする場合、対応しない場合に分類して論じている。

第3章では伝統的文法研究の成果に依拠して研究を行った結果、「の /of/ 的」3者の表層での歴史的展開の異同点が明らかになった。すなわち、「の」と「of」は機能語として展開してきたことに特徴があり、「的」は内容語から機能語へと文法化の道をたどってきたことに特徴があることが判明した。これらの異同を捉えたことは、次章以下でこの3者について考察を進める上での理論的基礎を固めたものと評価できる。

第4章 「の」, 「of」, 「的」 3者の認知文法から見た研究

現代語の「の /of/ 的」は似た意味を表すが、それらの意味は「の /of/ 的」そのものの意味ではなく、「の /of/ 的」の前後の2つの名詞間に生じる論理関係だと論者は考えている。そこで、そもそも「の /of/ 的」そのものの意味は何であるのかについて明らかにする必要があると論者は考える。この章では認知文法の面からこの3者の本質を捉えることになる。

日本語の「の」は、認知文法理論で考察すると、日本語の格助詞と共通する要素を持つ反面、異なる点もあることがわかる。「の」はメンタル・パスを提供することで格助詞と共通している。しかし、格助詞が意味を持つので心的接触のターゲットを制限することができるのに対して、「の」は意味を持たないのでターゲットの範囲を制限することができない。この点が異なっている。ターゲットの範囲を制限できないため、「の」は多義を生じやすい、としている。

英語の「of」については、認知言語学のラネカーが、「2つの存在物における内在的な関係を表す」ものと述べている。これは2つの存在物間にある「内在関係」「外在関係」に視点を置いて「on」, 「to」, 「of」を考察した結果導かれた結論である。しかし、論者は「内在的な関係」という表現では曖昧すぎて、多くの例外を生じてしまおうとしている。そこで、論者は現代英語の「of」が、原議である「分離」から派生したものであるとの理論を援用して考察し、ラネカーのいうその2つの存在物は、限定のない2つの存在物ではなく、1つの存在物、1つの全体から生じる2つの存在物であると考えべきである、との結論に至った。すなわち、論者は「of」の機能を「1つの存在物における2つの物の内在的な関係を表す」ものとする。

中国語の「的」が連体機能を持つようになったことは「的」の意味的な通時的展開とは関係なく、音声的な理由によるものであることが第3章で判明した。しかし、認知言語学的に考察すると、「的」がメンタル・パスを提供する場合の「参照点」と「ターゲット」が表層で「的」の前後の名詞となる際に「的」によりこのいずれかが重点化されるという現象があることから、「的」が歴史的展開において一貫して保持していた、あるモノ、ある部分を卓立化する機能がここで発現していると論者は考えている。すなわち、「的」は通時的意味の拡張とは関係なく「底」から連体機能を引き継いだわけであるが、その際「的」は自己に本来備わっていた卓立の要素を連体機能に付加した、と論者は考えている。

論者は先行研究で明らかになっている「的」の現代中国語での5種類の意味それぞれにおいてこの「重点化」を確認している。

以上の個別の考察ののちに、「の /of/ 的」3者を参照点理論のモデル図で表し、その異同を形の上で把握できるようにしている。また対応関係も表に示している。

本章では、「の /of/ 的」3者を認知言語学理論で捉え、その異同について明らかにしたことが評価できる。

第5章 日英中「N+の/of/的+N」の前言語構造と対照分析

本研究では発話表現としてのことばを生じるプロセスは、少なくとも3つの段階から成ると考えている。すなわち、事態を構成する諸要素間の関係を認知する「認知の段階」と、認知した概念を論理関係の形で整理する「前言語構造形成の段階」と、文法と音声をエンコードして「言語として伝達する段階」の3段階である。

この「前言語構造形成の段階」を設置することが本研究の特徴の1つであるが、この段階の存在を確かなものとして表現するために、日本語構造伝達文法の構造モデルに基づいて設定した本研究の構造モデルを使用している。このモデルに基づいて「N+の/of/的+N」の前言語構造のフレームを明らかにする。このため、「隣人の子供が来る /the son of the neighbour comes/ 邻居的孩子来了」の例を中心に考察を進めている。

この章では、2名詞の関係が構造モデルの上で、第3章、第4章で得られた「の/of/的」それぞれの特徴に従って明示的に表現されるようになり、その異同が形として把握できるようになった。このことが評価できる。

第二部 各論

第6章 日英中「N+の/of/的+N」の対照研究

第3章、第4章、第5章で得られた理論に基づいて、25通り（5種類の名詞どうしの組み合わせで、 $5 \times 5 = 25$ ）の組み合わせのそれぞれにおいて具体的な例を使って、非常に精力的に体系的に個々の「N+の/of/的+N」を対照している。各例において、意味と前言語的構造の両面から考察を行い、表層言語で「N+の/of/的+N」を使用する原因、使用しない原因、多義を生じる原因を論じている。また、「N+の/of/的+N」を生じる十分条件と必要条件を考察している。

すべてのありうる事象について検証するためには膨大な時間と労力が必要となるが、本章では第2章で確定した名詞5種類に限定して考察することにより、これを可能とした。また多義の生じる原因には実にさまざまな要因が存在するが、ここではこの研究に関係のある要因にのみ限定して考察を行っている。

最後に「の/of/的」の対応関係を一覧表にし、「N+の/of/的+N」の意味での対応と非対応について論じている。

本章では、工夫して体系的に設定した多くの事例に当たり、理論研究で得られた理論に従って考察を行っていることが評価できる。

結論

巨視的に見れば、日本語「N+の+N」、英語「N+ of + N」、中国語「N+的+N」

3つのフレーズは類似の意味を伝えているように見えるが、微視的に見れば、「の/of/的」はそれぞれの意味・機能が違うので、異なる内包意味を伝えていることが判明した。

「の」は論理関係にある2つの名詞を直接つないでしまうので、「N+の+N」の意味はその論理関係を知らなければ決められない。英語の「of」は2つの名詞間に内在的な関係を要求するので、「of」でつながれたとき、内在的な関係があることが「N+of+N」の特徴になる。中国語の「的」そのものの意味・機能は『『的』と関係がある2つの名詞のいずれかを重点化する』ことであるので、「的」で2つの名詞をつなげば、「N+的+N」の1つの名詞が重点化されていることになる。(それで、中国語の「的」を使わない「N+N」の形で伝える意味が日本語の「N+の+N」で伝える意味と近いと考えられる。)

つまり、言語の表層で見れば、日本語、英語、中国語3言語は対応するように見えるが、異なる言語には異なる言語特徴があるので、同じ「N+の/of/的+N」という形で表現しても、意味の上では100%の対応をすることがないという結論に至った。

[論文の特徴]

この論文には次のような特徴がある。改めて箇条書きにする。

- ① 日本語の「の」は格助詞であるか、名詞と名詞をつなぐ別の助詞であるかについての問題を改めて考察し、後者であるとの結論を得た。[第3章]
- ② 「的」の文法化の経路を明らかにした（「形容詞－名詞－副詞－助詞」）。[第3章]
- ③ 通時的側面から、「の」、「of」、「的」3者の伝統文法での異同点を明らかにした。[第3章]
- ④ 「の」そのものの意味を明らかにした。（ある名詞に心的な接触をするために、参照点となる名詞とその名詞の間にメンタル・パスを提供すること。）[第4章]
- ⑤ 「of」そのものの意味を明らかにした。（1つの存在物における2つの存在物の内在的な関係を表すこと。）[第4章]
- ⑥ 「的」そのものの意味を明らかにした。（「的」と関係がある2つの部分のうちの1つを重点化すること。）[第4章]
- ⑦ 認知言語学の「概念」を可視化した。（日本語構造伝達文法の「構造」モデルで可視化した。）[第5章]
- ⑧ 「前言語構造」という概念を提出した。（日本語構造伝達文法の「構造」に当たる。）[第5章]
- ⑨ 日本語構造伝達文法の考え方を認知言語学に導入した。[第5章]
- ⑩ 「N+の/of/的+N」3者の前言語構造におけるフレームを明らかにして対照し

た。[第5章]

- ⑪ 前言語構造の面から「N + の /of/ 的 + N」の構文意味を明らかにした。[第5章]
- ⑫ 「N + の /of/ 的 + N」を前言語構造の面から考察して、表層での対応、非対応、多義の原因を考察した。[第6章]
- ⑬ 「N + の /of/ 的 + N」3者は表現形式では対応するが、意味的に完全に対応することはないということを明らかにした。[第6章]
- ⑭ 「N + の /of/ 的 + N」を生じる十分条件と必要条件を考察した。[第6章]

[今後の課題]

本研究で得られた理論は仮説的段階のものであり、今後多くの事例で検証し、必要とあれば修正を加え、より適正な理論にしていくことが課題である。また、特に日本語、中国語にある、直接対照の対象となりにくい現象も分析し、それらの扱いについても考察することが課題となる。

[研究史における意義]

機能的に似ていると考えられる「の /of/ 的」を2者ではなく3者において、しかも深層における本質的な特徴において対照させたことは新しい試みである。日本語構造伝達文法と認知言語学の理論から捉えていることも新しい。研究史においては、この2点が意義あるものとして評価できる。

[評価]

以上のように、本研究は「の /of/ 的」3者それぞれの本質を日本語構造伝達文法と認知言語学の理論から捉えて対照し、価値ある結果を導いた。この新しい試みとその成果を論じた本論文は内容的にも研究史的にも大きな意義の認められる論文であると評価できる。このため、審査者一同は、論者である辛奕羸氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

氏名	董 昭君
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲国第 32 号
学位授与の日付	平成 26 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条
学位論文の題目	指示詞と時間に関する研究
審査委員 主査	前・杏林大学外国語学部教授 学術博士 今 泉 喜 一
副査	杏林大学外国語学部教授 文学修士 金田一 秀 穂
副査	杏林大学外国語学部教授 文学修士 楠 家 重 敏
副査	早稲田大学文学学術院教授 学術博士 森 山 卓 郎

要 旨

[論文の概要]

指示詞の研究は、先行研究では、現場指示・文脈指示・照応に関する研究が中心で、時間に関する研究はほとんどなかった。本論文では、指示詞「コ・ソ・ア」の時間に関する研究に正面から取り組んでいる。指示詞を①「指示詞＋時名詞」（限定時間と非限定時間）、②「指示詞＋空間名詞」、③「指示詞＋助詞」の3つの場合に分けて考察するが、考察に当たってはそれぞれの事例を、先行研究にない独自の時制図を用いて細かく分析している。

研究の結果、「コ」が絶対時制と相対時制の両方で使用できるのに対して、「ソ・ア」は絶対時制でしか使用できないということを始め、新たな知見が得られた。

[論文の特徴]

本論文には2つの特徴がある。その第1は指示詞を時間を指示する側面から捉えていることである。従来指示詞は空間的、心理的側面から研究されるのが普通であり、時間に関しては正面から扱われたことはなかった。本論文では指示詞「コ・ソ・ア」を、その関わる時間的名詞や助詞との関係において、独自の適切な分類のもとに考察を行い、結果として新知見を得ている。

第2の特徴は時間の適切な図示である。従来の時間に関わる研究ではS（発話時点）、E（出来事）、R（基準時点）の記号を用いて出来事間の時間的関係を図示することはあったが、これでは3点の時間的前後関係が捉えられるにすぎなかった。本研究では時間関係を「日本語構造伝達文法」の時相（テンス・アスペクト）の把握法、図示法に学んで発展させた独自の時制図により、絶対時、相対時、出来事の相対的長さ、指示詞等を細かく示すことができている、時間関係を直観的に把握できるようになっている。

本論文では、収集した事例に表現されている1つひとつの時間関係を分析し、図示による明示的な形でそれぞれの特徴を捉え、これに独自の適切な考察を加えている。

これが本論文の特徴である。

[論文の構成]

目次

1. 研究目的
2. 先行研究
 - 2-1. 指示詞に関する先行研究
 - 2-2. 時間と関係する先行研究
 - 2-3. 先行研究に対する本稿の見解
3. 研究方法
 - 3-1. 指示詞「こ・そ・あ」+ 時名詞についての研究方法
 - 3-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間（春・3月・曜日など）の研究方法
 - 3-3. 指示詞「この・その・あの」+ 非限定時間（とき）の研究方法
 - 3-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の研究方法
 - 3-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の研究方法
4. 結果と分析
 - 4-1. 「指示詞+時名詞」の限定時間と非限定時間の時制の使用率の調査結果と分析
 - 4-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間（春・3月・曜日など）の結果と分析
 - 4-3. 非限定時間としての「このとき・そのとき・あのとき」の結果と分析
 - 4-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の結果と分析
 - 4-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の結果と分析
5. まとめ

6. 今後の課題
資料
参考文献

[論文各章の内容]

1. 研究目的

指示詞「コ・ソ・ア」について先行研究でなされてきた研究は、現場指示・文脈指示・照応の研究などであり、時間に関する研究は進んでいるとは言えない、と述べ、本論文では、指示詞「コ・ソ・ア」の時間に関する指示範囲や使い分け、用法などを明らかにしつつ、その本質を解明する、とし、指示詞を①「指示詞＋時名詞」（限定時間と非限定時間）、②「指示詞＋空間名詞」、③「指示詞＋助詞」に分けて考察する、としている。

2. 先行研究

指示詞に関する先行研究として、主要な6研究者の研究を取り上げ、本研究との関わりから論じている。次に、指示詞とは直接関係ないが、時間について研究した先行研究として2研究者の研究を取り上げて論じたのち、「今」についての3研究者の考え方に触れている。

指示詞と時制の関係について研究したものは、断片的なものは別として、1件あるのみで、決して多いとは言えないとしている。

本論文では基本的な理解は先行研究と異ならないが、正面から指示詞と時制の関係を研究するために、指示詞と時制の関係を独自の時制図で示して考察することを述べている。また、「現在・今」を扱うための必要性から、先行研究にない2種類のものに分けることを述べている。現実の発話時としての現在を「げんざい・いま」と表示し、それ以外の記録内現在や設定現在などを「ゲンザイ・イマ」と表示する。これとは別に、現在を点として捉える場合と時間的幅と捉える場合の2つに分けている。後者の幅と捉える場合はさらに、過去幅を持つもの、過去・未来幅を持つもの、未来幅を持つものの3種類に分けている。分けられたそれぞれが記号によって区別され、図示しやすくなっており、直観的理解もしやすくなっている。

3. 研究方法

研究データとしての時間指示詞使用例文を青空文庫、Yahoo のブログ、電子版朝日新聞から収集することを述べ、町田（1989）の時制についての定義に基づいて分類することをまず述べている。続いて、例文に見られる時制関係は例文ごとに独自の時制図で精密に示す、としている。こうすることで、指示詞は時制によって使い分けがあるという見解を検証する、と述べている。そのあと、論文において使用する文字・

記号の意味を説明している。

次に、指示詞「こ・そ・あ」と組み合わせられる「時名詞」、「空間名詞」、「助詞」それぞれの場合の研究方法を述べているが、「時名詞」の場合は「限定時間名詞」と「非限定時間名詞」の2種類に分類するとしている。前者「限定時間名詞」は「春、日曜日、3月」のように客観的に時間的区切りが定まっている名詞であり、後者「非限定時間名詞」は「とき、ころ、間」のように主観的に時間的区切りが決められる名詞である、とする。

4. 結果と分析

4-1. 「指示詞+時名詞」の限定時間と非限定時間の時制の使用率の調査結果と分析

「指示詞+時名詞」のデータを過去・現在・未来という範疇において分類し、「こ・そ・あ」の使用数と使用率を限定時間と非限定時間に分けて調査した。その結果、次の2つの結論を得た。

- ・限定時間の指示詞と非限定時間の指示詞の使用領域の分布は同じである。いずれも主に「過去」で使われている。「この系」は「過去・現在・未来」の三つの領域で使われ、「その系」は「過去・未来」で使われる。「あの系」は、「過去」にしか使われない。

- ・限定時間の指示詞は、「コ系」が、「ソ系・ア系」より多く使われる傾向があり、非限定時間の指示詞は、「ソ系」が、「コ系・ア系」より多く使われる傾向が見られる。

4-2. 指示詞「この・その・あの」+ 限定時間（春・3月・曜日など）の結果と分析

指示詞が限定時間名詞とともに使用される場合（「この・その・あの+春、この・その・あの+3月、この・その・あの+（日・月・火・水・木・金）曜日」）の実例を、絶対時制・相対時制の視点から分析・考察し、結果として、限定時間で使用される「この」は絶対時制の過去・現在・未来で使用され、「その」は過去・未来で、「あの」は過去で使用されることが明らかになった、としている。また、「この」は相対時制で出来事を捉えることも可能ではあるが、収集したデータの中になかったことから、あまり使用されないのではないかとしている。

4-3. 非限定時間としての「このとき・そのとき・あのとき」の結果と分析

指示詞が非限定時間名詞「とき」とともに使用される場合（「このとき・そのとき・あのとき」）の実例を、絶対時制・相対時制の視点から分析・考察し、「このとき」は絶対時制・相対時制で使用するが、「そのとき・あのとき」は絶対時制でのみ使用する等を明らかにしている。また、限定時間と同様、「コ系」は過去・現在・未来で使用され、「ソ系」は過去・未来で、「ア系」は過去でのみ使用されることが明らかになったとしている。

考察ののち、結果を3つの図（絶対時制図・相対時制図・反復図）にまとめている。

42、43では日本語構造伝達文法理論の時相図を参考にして独自に作成された時制図を用いて考察を行っていることに特徴がある。その図は、先行研究で使用している発話時と事態の関係を単なるS（発話時点）、E（出来事）、R（基準時点）などの記号で示した図よりかなり直観的に理解しやすい形で示すことができるようになっている。

このように時制図を用いて時間関係を理解しやすく論を進めていること、結果的に新知見を得ていること、結論を3モデル図に集約していることなど、先行研究にない特徴として評価できる。

4-4. 指示詞「この・その・あの」+ 空間名詞（前・後・先など）の結果と分析

指示詞が、時間の意味で使用される空間名詞「先・前・後」とともに使用される場合、つまり「指示詞（この・その・あの）+空間名詞（先・前・後）」の形になる場合について、収集した事例それぞれの時制を1つひとつ図で示し、その異同が形として把握できるようになっている。これらの形をとおして考察した結果、コ系は絶対時制・相対時制の両方で使用するが、ソ系・ア系は絶対時制でしか使用しないこと、また、コ系は過去・現在・未来の三領域で使用するが、ソ系は過去・未来の領域に、ア系は過去の領域に限定されることなどが確認できた。

最後に、時間としての「空間名詞」に伴う指示詞の使用の全体が一目で分かるよう、時制のある場合の4図と超時的な場合の1図、計5つのモデル図に集約している。

以上のような、図による分析、指示詞の時制上での使用の確認、モデル図への集約等は、いずれも独自の研究の成果として評価できる。

4-5. 指示詞「これ・それ・あれ」+ 助詞（から・まで）の結果と分析

指示詞（指示代名詞）が時間に関わる助詞「から・まで」とともに使用される場合、つまり「指示詞（これ・それ・あれ）+助詞（から・まで）」となる場合を扱う。それぞれの例文について分析し、図で異同を示したのち、最後にそれらの関係を時制のある場合と超時的な場合の2つの図にまとめている。これも先行研究にはない新たな知見を示す図であり、直観的に理解しやすいものとなっていて、評価できる。また、コ系、ソ系、ア系の指示詞の使用分布についてはすでに述べてきた傾向と同じであることを述べている。これは全体的に一貫しているものであることが判明したと考えられる。加えて、「から・まで」が時間的方向性を持つことについての考察を行っている。

5. まとめ

上述の内容を改めて簡潔にまとめている。本研究により、「コ」が絶対時制と相対時制の両方で使用できるのに対して、「ソ・ア」は絶対時制でしか使用できないことが明らかになったことなどを述べ、さらに、各種の時間指示詞の使い分け、用法などが明らかになったと述べている。

6. 今後の課題

今後の課題として、新たに獲得した仮説、「コ・ア」が「真の時間」を指示するのに対して「ソ」が「真の時間・仮定の時間」の両方を指示するという仮説を検証する必要があると述べている。

資料

4-2 の限定時間、非限定時間に関する実例を資料として集めている。

[研究史における意義]

先行研究では、指示詞は空間的、心理的側面から研究されるのが普通であり、時間に関してはほとんど扱われたことがなかった。本論文は指示詞の時間的側面を正面から研究し、成果を得ている。

また、先行研究の時間に関する研究では、S（発話時点）、E（出来事）、R（基準時点）の記号を用いた簡単な図示が行われていたが、本論文では独自の時制図により、絶対時、相対時、出来事の相対的長さ、指示詞等を細かく示すことができおり、時間関係を直観的に適切に把握できるようにしている。

研究史においては、この2点が意義あるものとして評価できる。

[評価]

以上のように、本論文は指示詞について従来ほとんど扱われることのなかった時間的側面を新しい方法で研究し、新知見を得ており、内容的にも研究史的にも意義の認められる論文であると評価できる。このため、論者である董昭君氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。

氏名	山内 美穂
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲国第 33 号
学位授与の日付	平成 26 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条
学位論文の題目	「並列」機能を持つ助詞の談話における働き — 「単独」用法に着目して—
審査委員 主査	杏林大学外国語学部准教授 文学博士 鄭 英 淑
副査	杏林大学外国語学部教授 文学修士 金田一 秀 穂
副査	東京大学大学院総合文化研究科教授 言語学博士 大 堀 壽 夫

要 旨

[論文の概要]

日本語の並列機能を持つと言われている助詞「モ」「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」が、現代語では単独で使われる場合があり、その現象に着目して、それぞれの機能用法について考察した。

[論文の特徴]

それぞれ並列の助詞は、規範的に、並列することとして扱われているのだが、それらが単独で使われている用例が現代語に溢れており、無視できない。

山内は、レイコフ等の構文理論にもとづき、単独で使われるこれらの助詞の含まれる構文を仮定し、並列から単独への用法の説明を、個々別々に考えるのではなく、寺村 [1991]などを援用し、統合的、全体的に説明しようと試みている。

現代語コーパスを資料として、理論を実証し、きわめてわかりやすく説得的な議論を展開し、妥当な結論を得ている。

[論文の構成及び内容]

全 114 ページ。

研究目的・先行研究・研究方法・結果と分析・今後の展望によって構成され、論理

的、明晰である。

先行研究として、寺村秀夫 [1984] [1991]、森山卓郎 [1995]、中俣尚己 [2009] を挙げて、現代語における並列助詞の扱いについて研究の全体を概観している。また、此島正年 [1966] をはじめとして、岩田彩志、京健治などの通時的な研究にも目配りされている。

「トカ」「タリ」「シ」などの単独用法の個々の研究に触れた後で、山内は、並列用法を持つ助詞のうちで単独に使用可能なもの「モ」「トカ」「ヤラ」「ダノ」「ナリ」「タリ」「シ」を研究の対象にした。

用例は会話コーパスにかぎられている。ホッパー [1998] の創発的文法の考え方、すなわち文法は日常的な使用によって形作られていく、という考え方に基づくものである。

データは、国立国語研究所 [2008] 『日本語話し言葉コーパス 2004・第2版』、宇佐美まゆみ監修 [2011] 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版』さらに、山内の採集したデータが6会話ある。話者は100人、各世代に均等に分布しており、現代語データとして妥当性が高いと考えられる。

「モ」については、並列、累加、ほかし、極限の機能を、日本語記述文法研究会 [2009] に基づいて説明した。

「トカ」は、並列 [集合の代表例]、概数、集合を示す、動詞の名詞化による例示、不確定引用があり、「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意するとした。

「ヤラ」は、並列 [集合の代表例]、代表例以外の候補の暗示、対立する項目を上げる慣用的な用法、また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意するとした。

「ダノ」は、並列 [集合の代表例]、代表例以外の候補の暗示のほか、提示される要素が話し手や書き手にとって望ましくない、又価値がないものとして扱われる傾向があることを述べ、また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意する。

「ナリ」は、会話の場で話者の意識に浮かんだ集合から候補例を二つ以上挙げる。集合の代表例とともに、ほかにもあることを暗示する。いずれにせよ、用例が極めて少なかった。

「タリ」並列、[会話の場で話者の意識に浮かんだ『集合』から候補となる事態、側面を取り出して二つ以上挙げる。]、[会話の場で話者の意識に浮かんだ『集合』から候補となる事態、側面をひとつだけ取り出して、それ以外の事態や側面の存在を暗示する。話者の伝えたい事態を言表しながら、同時にそれと相反する話者の概念も暗示する。この機能により「可能性」「意外性」「冗談」「控え目表現」などが生まれる。また「モ」と同様の言語化されなかった「影」を含意する。

「シ」二つ以上の節を並列し、前後の節を繋ぎ、話者自身又他者の直前か少し前の発話情報に別の情報を並列的に累加する。また単独でも話者の主張を補強する。単独では、その他の「シ」節や話者の主張の存在も暗示する。「モ」と共通のものとして、

少し前の発話に、同類の情報を累加し、聞き手に影を浮かばせる。

それぞれの各論は、全体的な視野の中での位置づけが明確であり、理解しやすい。論点が整理されている。

さらに、これら並列助詞の、並列用法における同異、単独用法における同異をまとめて示した。

[研究史における意義]

並列助詞の単独用法については、今まで個別に取り上げられることはあっても、このように全体的な取りあげられ方はされたことがなかった。全体的な視点に立つとき、個々を見ていたのでははっきりしない点が明らかになり、それぞれの相違点だけでなく共通点も明らかになった。

データを口語会話に絞ることで、生き生きとした現代語会話の文法が解明され、創発的文法の現場が示された。

「タリ」「シ」などの分析については、まだ不十分な点が残るが、いずれにせよ、今後並列助詞について分析しようとする研究は、本論文を無視して進むことはできないだろう。

[評価]

本論文は、すでに山内が、日本語教育学会、日本語文法学会また認知言語学会などにおいて、発表してきた論文に基づいており、外部での厳格な審査を通過してきたものである。

内容的には、それらをまとめ集大成したものと言える。これからさらに研究を進めるうえでも、この研究の経験によって得られた科学的な方法論をもとにして、確実に進めていくことが出来るだろう。

本研究科において博士号を与えるにふさわしい論文であると言える。審査者3名の全員一致の結論である。

RONBUN SHU (XII)

CONTENTS

Articles

The usage of the conjunctive particle “monono”

— through the analysis of public comment —

.....Masahiro Hata

杏林大学大学院国際協力研究科論文集 第12号

発行年月日 2015年3月31日

編集発行者 杏林大学大学院国際協力研究科長 大川 昌利

東京都八王子市宮下町476

電話 042(691)0011

印刷 株式会社 コームラ

〒501-2517 岐阜市三輪ぷりんとぴあ3

Tel 058-229-5858

Fax 058-229-6001